

釧路市緑ヶ岡 S T V 遺跡発掘調査報告

— 第一次調査 ・ 第二次調査 —

沢 四 郎 編

目 次

1. 調査経過の概要	(3)
2. 遺 跡	(4)
3. 住居址の調査概要	(5)
1). 1号住居址	(5)
2). 2号住居址	(7)
3). 3号住居址	(10)
4). 4号住居址	(12)
5). 5号住居址	(14)
6). 6号住居址	(16)
7). 7号住居址	(18)
8). 8号住居址	(19)
4. 発掘区の調査概要	(20)
1). 第1発掘区	(20)
2). 第2発掘区	(20)
3). 第3発掘区	(24)
4). 第4発掘区	(25)
5. 縄文前期の住居址概要	(26)
1). J-2号住居址	(26)
2). J-3号住居址	(26)
6. 結 語	(26)

挿 図 目 次

第1図 銅路市緑ヶ岡STV遺跡の位置	(3)
第2図 遺跡付近の地形測量図	(4)
第3図 1号住居址平面図	(5)
第4図 竪穴住居址の層位図1	(6)
第5図 2号住居址平面図	(8)
第6図 2号住居址のカマド址	(8)
第7図 2号住居址外出土遺物	(8)
第8図 3号住居址平面図	(9)
第9図 3号住居址のカマド址	(10)
第10図 4号住居址平面図	(12)
第11図 4号住居址のカマド址	(13)
第12図 4号住居址内の遺構層位図	(13)
第13図 出土遺物1	(13)
第14図 5号住居址平面図	(15)
第15図 6号住居址平面図	(16)
第16図 竪穴住居址の断面図	(17)
第17図 出土遺物2	(17)
第18図 7号住居址平面図	(18)
第19図 7号住居址のカマド址	(18)
第20図 竪穴住居址の層位図2	(20)
第21図 8号住居址平面図	(20)

第22図 8号住居址のカマド址	(21)
第23図 出土遺物3	(22)
第24図 出土遺物4	(22)
第25図 出土遺物5	(22)
第26図 第1発掘区の大形 Pit	(23)
第27図 各発掘区の層位図	(24)
第28図 各発掘区の平面図	
第29図 J-2号住居址平面図	(27)
第30図 出土遺物6	(27)
第31図 出土遺物7	(28)
第32図 J-3号住居址平面図	(28)
第33図 出土遺物8	(28)

図 版 目 次

1 遺跡全景1	(29)
2 遺跡全景2	(29)
3 遺跡全景3	(30)
4 1号住居址	(30)
5 2号住居址	(30)
6 3号住居址	(30)
7 4号住居址	(30)
8 5号住居址	(30)
9 6号住居址	(30)
10 7号住居址	(30)
11 8号住居址及び竪土中の炭化物	(30)
12 第1発掘区の大形 Pit	(30)
13 J-3号住居址	(30)
14 7号住居址のカマド址	(30)
15 8号住居のカマド址	(30)
16 2号住居址の鹿角、鹿骨出土状態	(31)
17 3号住居址粘土塊出土状態	(31)
18 8号住居址出土遺物1	(31)
19 8号住居址出土遺物2	(31)
20 2号及び8号住居址出土遺物3	(31)
21 1号及び8号住居址出土遺物4	(31)
22 8号住居址出土遺物5(木製品)	(31)
23 8号住居址出土の自然遺物1	(31)
24 8号住居址出土の自然遺物2	(31)
25 8号住居址出土の自然遺物3	(31)
26 J-3号住居址床面の礫石	(31)

1. 調査経過の概要

釧路市を流れる釧路川左岸の台地、釧路段丘上には、かつて1000個を越える数の竪穴住居址が存在していた。しかし、明治以降の釧路市における市街地の発展は、これらの竪穴を含めて多くの遺跡を消し去った。その数は昭和のはじめ頃には半数以下に減り、特にここ12・3年の間に残余のほとんどが失われ、もはや昔日の面影はない。こうした状況の中で、STV遺跡は東・西の小さな舌地に6個と2個とかつてのアイヌのコタンを髣髴させるように、とり残されていて、興味をそそられた。ところが、この遺跡も一昨年宅地造成で西台地が破壊されるという事態に直面し、引続き東台地も土木工事で近い内に失われるという報に接した。釧路市教育委員会では周囲の状況からその保存は無理と判断し、単年度での緊急発掘調査が計画された。はじめは、一回の調査で、遺跡全体を可能な限り発掘し、集落全体の構造を、探る予定であったが、日程、調査員、予算不足も手伝って、2・3年にまたがった。

第一次調査は昭和45年7月28日～8月6日までの10日間、釧路市教育委員会の主催で釧路市立郷土博物館が主体となりおこなわれた。この年はとりあえず、破壊を目

前にした西台地の竪穴住居址2個とその周囲発掘に主力を注ぎ東台地は先端部にある竪穴2個を完掘するにとどまった。調査員として、西幸隆、宇田川洋、大沼忠春、豊原熙司、山崎哲、山本文男、松田猛、高橋和樹、沢四郎（発掘担当者）が専従した。発掘協力者は次の方々であった。

釧路第一高校考古学部（山田哲朗、徳田博文、中原幸雄、清野雅彦、南俊晴、鈴木敏夫）、釧路湖陵高校考古学部（金子雄二）、釧路工業高校郷土史クラブ（本間明恭）羅臼春松中（本田克代）、札幌静修高校（安部喜佐子）札幌成徳専門学校（村井瑞枝）釧路共栄中（小西雅徳）釧路市教育研究所（佐藤信雄）、釧路東中（中村健裕）釧路江南高校考古学部（涌坂周一）。

第二次調査は昭和46年8月12日～22日、9月2日～4日、10月18日の14日間、釧路市立郷土博物館の主催によりおこなわれた。本調査では、東台地の縄文文化期の竪穴住居址4個と縄文早期の竪穴住居址2個を完掘し、本遺跡の聚落構成について追求した。調査員としては、宇田川洋、大沼忠春、豊原熙司、佐藤隆広、大谷敏三、小林敬、山崎哲、山本文男、松田猛、西幸隆、沢四郎らが専従した。発掘調査協力者は次の通りである。

釧路市立郷土博物館（橋本正雄）、千葉県舟橋市（大沼あさ子）、釧路江南高校考古学部（涌坂周一）、釧路



第1図 釧路市緑ヶ岡STV遺跡の位置



第2図 遺跡付近の地形測量図

第一高校考古学部（山田哲朗、南俊晴）。

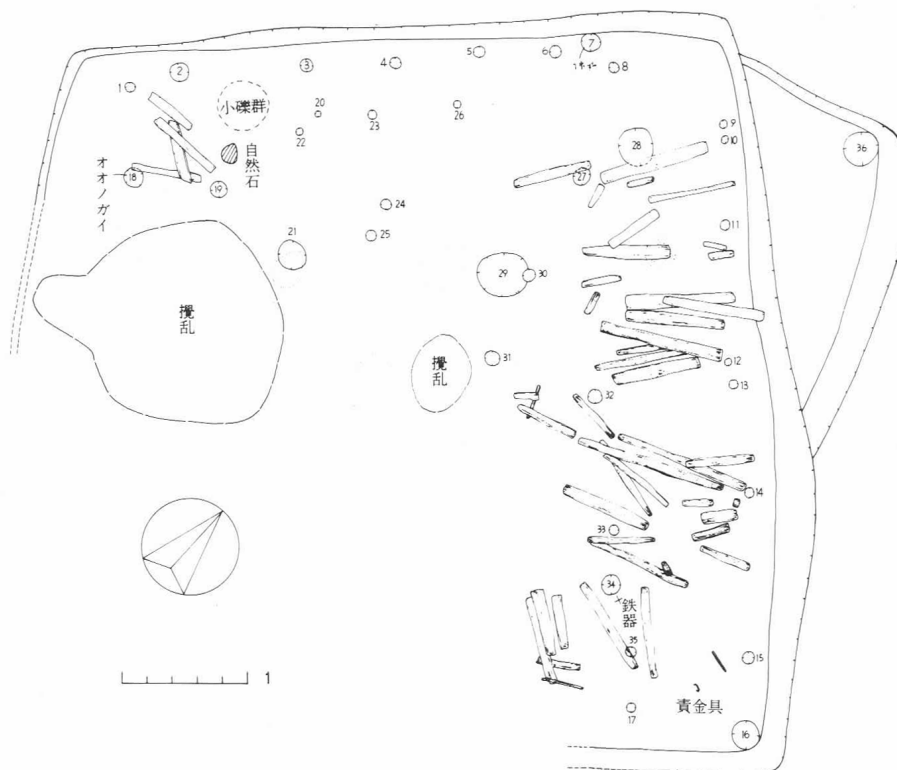
本文の執筆にあたっては、各調査員の共同討議の上で各項目別に担当し、その文責を文末に記した。図版作成は宇田川洋・西幸隆・山本文男・大沼忠春・松田猛・山崎哲がおこない、全体を沢が編集した。したがって、本書に万一誤りがあるとすればそれはすべて沢の責任である。

（沢 四郎）

2. 遺 跡

当遺跡は、釧路市緑ヶ岡16番地9～10に所在し、釧路

市街地より約1km離れた住宅地の中にある（第1図）。西側には北東から南西にゆったりと流れる釧路川をひかえている。標高25m内外の海岸段丘上に位置しているが当段丘は付近一帯に発達しているものである（第2図）。そして、本STV遺跡より北西方約500mには、すでに宅地化のため壊滅した釧路緑ヶ岡遺跡の大聚落群、また、北北東方約1kmの地点には東釧路遺跡の貝塚と竪穴住居址群がある。さらに南方に目を転ずれば、約1kmで春採湖畔のチャランケチャシコツならびに竪穴群が位置している。これらの当遺跡を含む4地点を結ぶ範囲内には、すでに壊滅し去った聚落が数多く存在していた。たとえ



第3図 1号住居址平面図

ば、昭和8年8月の調査図(川合真平調査、釧路市立郷土博物館所蔵)によるこの地域付近の竪穴は、総個数 496個を数える。なお、当STV遺跡に相当すると思われる位置には14個が数えられており、東台地に3個と6個の2列計9個、西台地に5個がプロットされている。

本遺跡は、現在確認される部分においても2ブロックに分けることが可能である。すなわち、南東方と北西方の舌状に張り出す台地がそれぞれあり、それぞれ「東台地」「西台地」と呼ぶことにする。前記の如く、昭和8年の段階では東台地には3個と6個の2列の竪穴が存在していたはずであり、西台地には5個がなければならない。ところが現状では、東台地に1号～6号の6個、西台地に7・8号の2個を残すのみである。両台地北側部分は、さほど地形に変化を受けていないと思われることより、不足分の竪穴は南側に存在していたと考えられる。つまり、釧路女子短期大学の敷地に当るグラウンド整備あるいは南西側に位置している釧路市立北陽高等学校のグラウンド整備などの際に破壊された可能性を指摘できるわけである。

竪穴の存在する標高は25～28mであるが、もし南側部分にすでに破壊されたものが存在したとするならば、標高20mほどまで下ることが考えられる。

西台地の北西方にやや平坦なテラス状の小台地が北方

に張り出しているが、その付近のL字状の濠の末端部はかって湧水池であったと聞く。また、現在、釧路女子短大グラウンドの部分はひとつの大きな沢であり、同様に水の豊富な個所であった。この沢は、仏舎利塔・御供山のモシリヤチャシコツの南を抜けて釧路川に通じるものである。

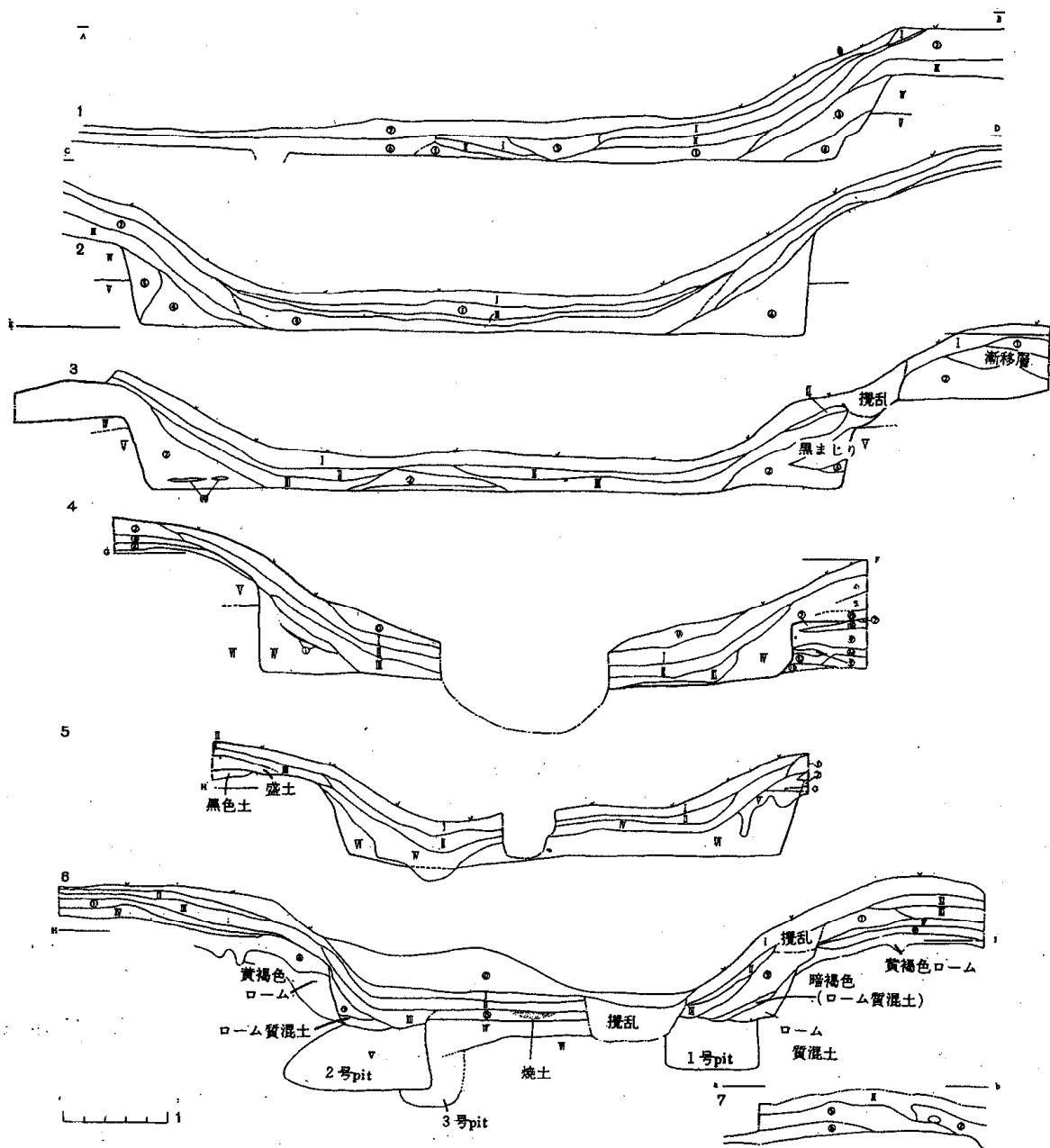
このように当遺跡は、周辺の海岸段丘縁辺部に位置する東釧路遺跡や緑ヶ岡遺跡のグループ、そして、春採湖畔に臨むグループとともに段丘の比較的内部に位置するグループとしてその立地的な点からの資料的価値の高いものである。

(宇田川 洋)

3. 住居址の調査概要

1) 1号住居址

層位：1号住居址南側 $\frac{1}{4}$ あまりは釧路女子短大校庭拡張工事で床面まで破壊され、すでになかった。その際、住居址中央より南隅に近い部分は表土及び第II層が削られ、一部は床面近くまで攪乱され、正確な層序は観察できない状態にあった。そのため住居址断面観察用のカッティングを中心線からややずらし、北西—南東方向に、設けて発掘した。その層序は次の通りである(第4図参照)。



第4図 竪穴住居址の層位図1

1、1号址・2、2号址・3、3号址4、4号址・5、5号址

6、6号址・7、2・3号址間

第Ⅰ層：表土は火山灰を混じえた黒色土である。住居址落ちこみの内側に認められた。南東壁の外側では②の盛土が露出しない。これらの層を覆って近年に堆積した白色火山灰⑦がある。第Ⅱ層は厚さ3cmから15cmの火山灰層であり、釧路地方の台地に一般的にみられるものである。第Ⅲ層は暗褐色土層だが、住居址内部にはなく、僅かに流れこんだ状態で、南東壁側に②、③層間にみられるに過ぎない。厚さは15cmである。第Ⅳ層は橙色火山灰層、厚さ40cm、第Ⅴ層肌色火山灰層で床面に達する。

住居址内部には、②の盛土と同じものと考えられる①、②、③、④の層が認められ、それぞれ少しずつ異った色調を示していた。①、③の下層及び④層中には多くの炭化材が含まれ、その上下にヨシ類の炭化したものも検出された。③、④は一部焼土と化していた。⑤、⑥の層はこの住居址と関係ない⑦層堆積前の攪乱層で、ごく近年のものである。住居址内部に認められた①～④の層は住居の屋根を覆った盛土と考えられる。図示しなかったが1号、2号住居址の新旧関係をセクションを延長し、追

第1表 1号住居址のPit

No	径 cm	深さ cm	No	径 cm	深さ cm
1	10	-15	19	14	-8
2	16	-25	20	6	-5
3	11	-30	21	23×25	-7
4	10	-23	22	6	-6
5	9×10	-8	23	6	-6
6	9	-12	24	9	-9
7	16	-20	25	8	-10
8	8×9	-14	26	6	-7
9	8	-12	27	13	-39
10	6×8	-10	28	31×28	-12
11	8	-15	29	40×25	-20
12	6	-6	30	10×9	-12
13	7	-17	31	14×11	-9
14	7	-16	32	12×10	-14
15	10	-18	33	9×8	-21
16	25×22	-9	34	16	-42
17	7	-10	35	10×9	-16
18	16	-7			

求した。その結果、2号住居址の盛土が1号住居址の上ののっていたことから、1号は2号より古いということが確認された。

遺構：住居址壁面は第Ⅲ層を切って掘り下げられ、第Ⅴ層を床面としている。断面にみられる壁の高さは40cmである。プランは隅丸方形、北西壁の長さ 5.6m、北東壁は6.18mを算し、南西壁 1.2m、南東 1.55 mを残して、破壊されている。従ってカマドはない。長軸の方向はN45°Eである(第3図)。北東壁の北側に張出しがみられるが、これは、縄文文化期のJ-1号住居址の一部であり、本住居址はこれを切ってつくられたものである。床面には、a (30cm×20cm)、b (40cm×30cm)、c (50cm×30cm)の焼土を認めたが、いずれも厚さは5cm内外のもので、aは pit 21の上ののっていた。

柱穴様の pit は中央の楕円形を呈する後世の落ちこみ(60cm×50cm、-38cm)及び北西側寄りの同様の落ちこみ(155cm×200 cm)を除いて、35ヶ認められた。その計測値は、第1表の通りである。21、28、29、34の pit が支柱と想定されそうであるが、位置は混乱している。側壁沿いに認められる小pit 17及び7と17のpit間を結ぶ直線上に位置する27、32～35などは規則的に配列されており床面に接して①～④層中から出土した炭化材と関連させて、住居の構造を知る上で手掛りとなろう。

遺物：屋根材と考えられる木炭はナラのそれに類似している。覆土中から無文の研磨光沢を有する土器が1片

出土している。擦文式土器の胴部下半の破片である。金属器としては刀子破片1と刀の責金具(鉄製)が1点ずつ出土している(第13図3)。北西壁の西隅近くにコモ編み用の錘石とみられる細長い自然礫40ヶが、径40cm×40cmの範囲内に出土した。

自然遺物として18 pitの中から、自然石3ヶを混じえて、オオノガイが2・3個体検出された。また7 pit からヒエ様の実が検出された。pit 中に含まれたソフトな土を含めた総重量は 1.5kgである。覆土中からエゾシカの四肢骨の小片が1例出土している。

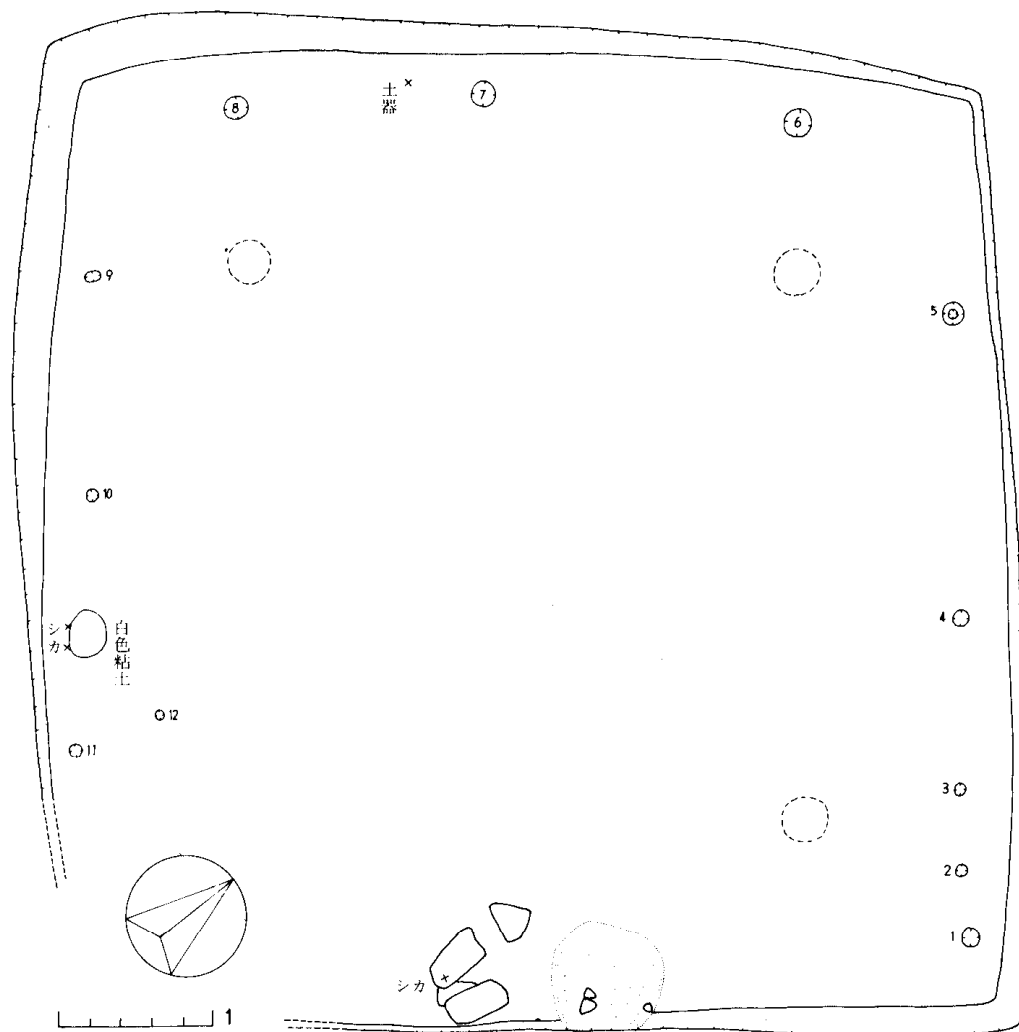
付記：本住居址に伴う遺構かどうかは詳かでないが、住居址の西側3mの地点に配石遺構が認められた。この遺構は径1.5m、深さ35cmの、橙色火山灰層を掘りこんだpit中に自然礫の焼けたこぶし大のものが139個集中して出土した。時期を示す文化遺物はまったく出土しなかった。尚、1号址付近より重さ40g、安山岩製石錘が出土した(第33図10)。

(沢 四郎)

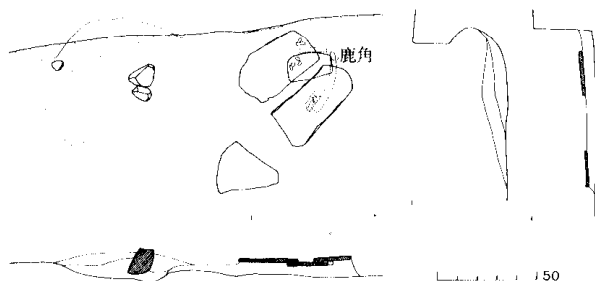
2) 2号住居址

層位：住居址の中央部からやや北西に外れた北東-南西方向のセクションによると(第4図)、第Ⅰ層は表土で5～15cm。表土中にあって、10cm前後の厚さを呈する黒色土①が住居址の中央部付近にのみ堆積していた。第Ⅱ層は白色火山灰で5cm前後、黒色土と同様に住居址の内部に認められる。さらに下層にローム状の火山灰による盛土②が住居址の内部の壁面付近から外部にかけて堆積していた。この盛土と同層位に住居址内部では床面まで達する10～15cmのやや暗褐色を帯び、黒色土あるいは黄褐色土を多く含む層③が認められる。盛土との区分は顕著ではなく明確に捉えることは出来なかった。第Ⅲ層は暗褐色土で、傾斜して床面あるいは床面近くまで堆積しており5～15cm。住居址の壁面および床面付近には、住居の屋根をおおっていた覆土の堆積物と思われるローム状の火山灰④が堆積している。幾分黒味を帯びており比較的軟質である。一部南西壁付近では、逆に硬質な黄褐色のローム状の火山灰⑤が、認められた。第Ⅳ層は、橙色火山灰層であり、40cm前後で淡色の、第Ⅴ層の肌色火山灰層に達する。住居址は第Ⅳ層および肌色火山灰層をも掘り込んで構築されている(第4図参照)。

遺構：住居址の壁は第Ⅲ層の暗褐色土より掘り下げられており、壁面の高さは70～100cmを計る。完掘後のプランは、北東-南西方向6.45m、北西-南東方向 6.4m、で方形を呈する。長軸方向はN53°W(第5図)。住居址の南西・南東壁および床面の一部がすでに破壊をうけ削除されているが、ほぼ全貌を捉えることが出来る。



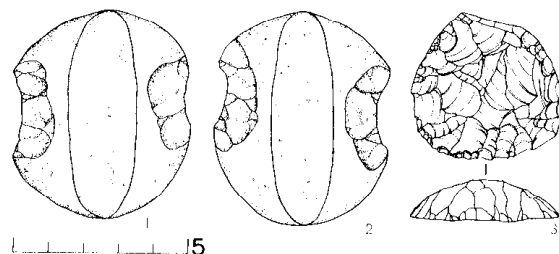
第5図 2号住居址平面図



第6図 2号住居址のカマド址

南東壁のほぼ中央部に直径80cmのやや円形を呈する木炭混りの焼土が認められた。厚さ7cm。さらに下に直径55cm、厚さ10cmの断面がやや深いレンズ状の真赤な焼土がみられる。焼土は、いずれも壁面を10cm切り込んでおり、壁面は内湾し、その高さは20cmを計る(第6図参照)。この焼土からやや外れて砂岩が4個出土した。焼土、砂岩の位置およびこれらの状態から、カマド址と測定して大過なからう。焼土付近においてカマドに用いられた砂岩が何らかの作用によって移動したものと考えられる。いずれにせよ形態的に他の住居址のそれと異なるという点は確かであろう。

炉址は認められず、床面からは北東壁近くより径12cm



第7図 2号住居址外出土遺物

の白色粘土塊が発見されたのみである。

柱穴様の小穴は12個発見されたが、いずれも支柱穴と思われるもので、南東壁をのぞいた他の壁面近くに、これにほぼ並列して発見された。北西壁沿いの3個(6・7・8)は比較的等間隔に配列され、規模もやや一定している。北東、南西壁沿いの小pitの場合は径10cm前後でやや不規則ではあるが、これらの支柱穴はいずれも壁面から20cm前後の位置に配列されている。大きさ、深さは別表(第2表)の通りである。

主柱穴とみなされるべき柱穴のpitは、南隅をのぞいた3箇所(第5図)に認められた。それぞれ粒状の黒土を多量に含んでおり5cm前後の深さで、直径25cmを計

第2表 2号住居址のPit

No.	径 cm	深さ cm	No.	径 cm	深さ cm
1	12	-15	7	17	-23
2	8	-23	8	15	-37
3	7	-14	9	7	-19
4	10	-24	10	7	-15
5	15	-27	11	7	-14
6	18	-33	12	9	-28

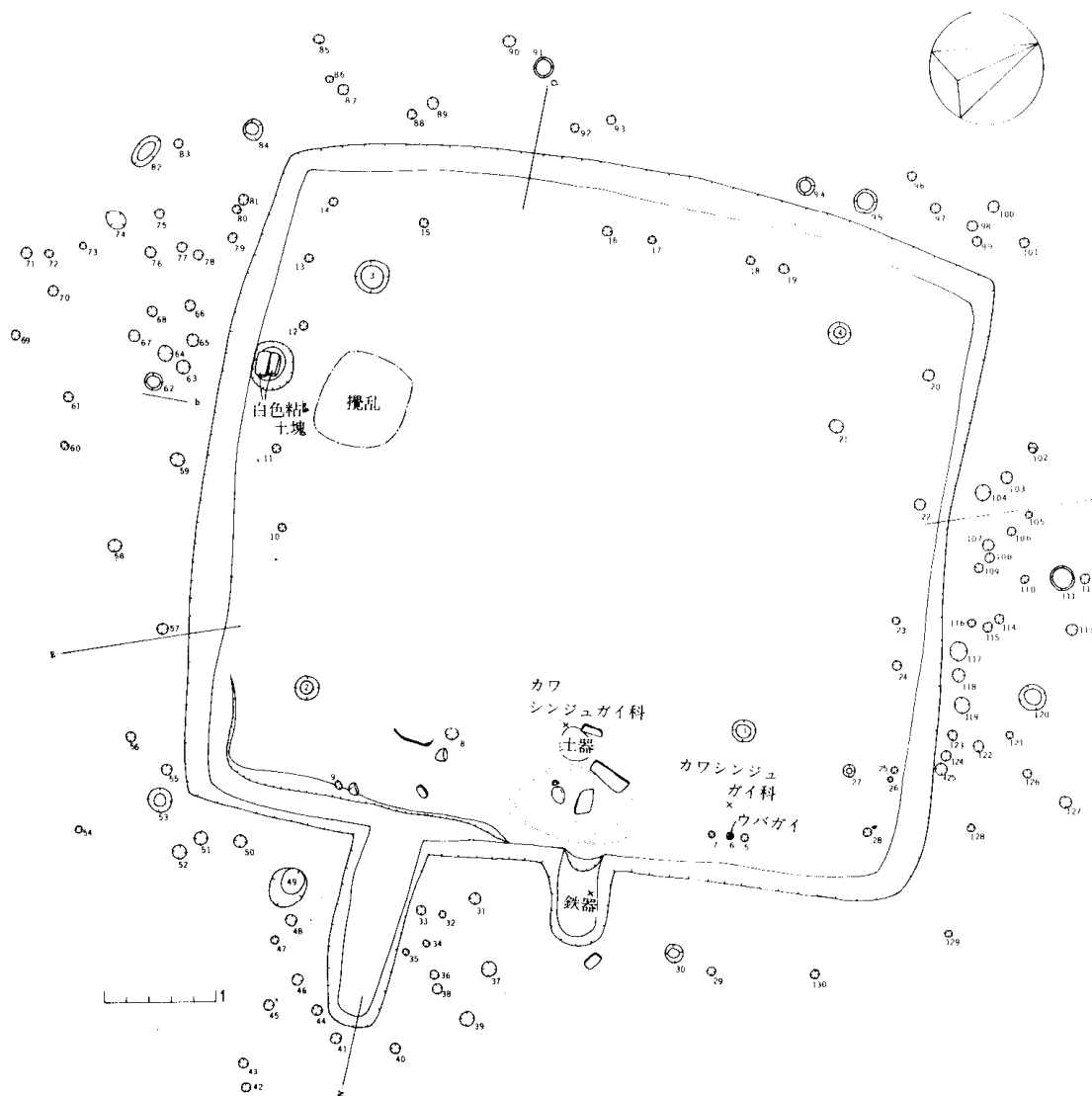
る。むしろ、壁面に並列して配列された支柱によって支えられたものとも想定されるが判然としない状態である。

遺物：北東側の住居址外部の盛土上面から短軸の石錘が出土した（第7図1）。安山岩質で、重さ60gを計る。同様な石錘が南東側の盛土上面からも出土している（第7図2）。安山岩質で重さ55gを計る。南西側の盛土上面から黒耀石製の搔器が1点出土した（第7図3）。

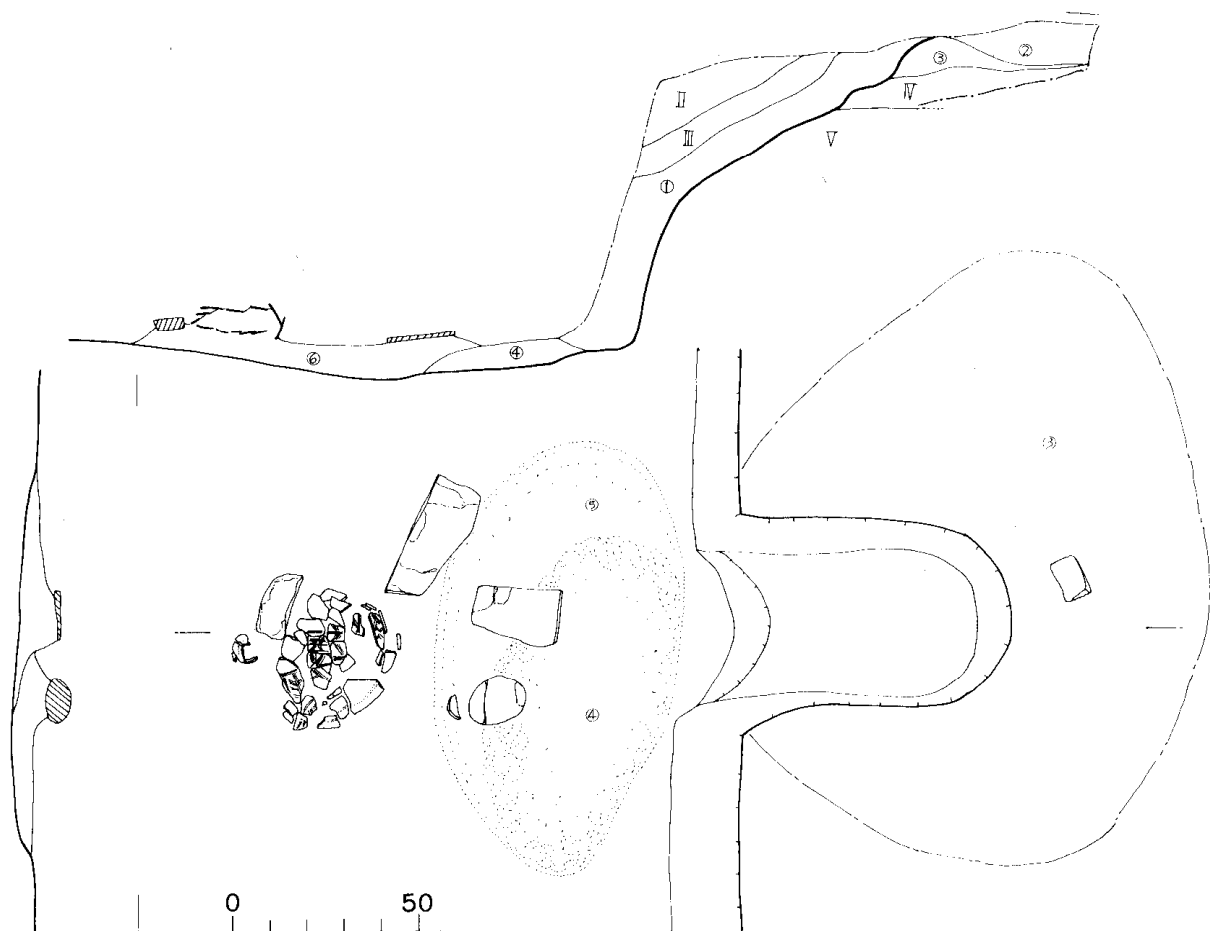
床面からは以下の遺物が摘出された。北西壁近くで擦文式土器の胴部破片が出土した（第17図3）。色調は黄褐色を帯び、胎土に多量の細砂礫を含み脆い。

南東壁のカマド址とした木炭を含む焼土の上面から小形の自然礫が3個出土した。さらに前述した砂岩の下部から鹿角と鹿骨が出土している。鹿角は2点あるが、第13図1の資料は先端方向が欠損しており詳らかでない。残存する第2枝と第3枝の中間部の長さは32cmを計る。基部付近は鋭利な刃物により幾分傾斜して切断された形跡をもつ。体部はほぼ全縁が自然面を留めている。第13図2も同様であり傾斜した切断面が側縁部に観察される。残存する長さは10.5cmを計る。加工の施された部分は基部付近と想定される。体部は多くが欠損しており詳らかでない。同様な位置から四肢骨が10点出土している。更に南西壁近くの白色粘土塊が出土した床面付近から2個の四肢骨が出土した。

(西 幸隆)



第8図 3号住居址平面図



第9図 3号住居址のカマド址

3) 3号住居址

層位：自然堆積の層序関係はつぎの通りである（第4図参照）。第Ⅰ層表土、第Ⅱ層白色火山灰（W火山灰と仮称）、第Ⅲ層W火山灰を含む茶褐色土、第Ⅳ層黒色腐植土（旧表土）、第Ⅴ層橙色火山灰（O火山灰と仮称）。このⅤ層は、より下層の肌色火山灰（S火山灰）が風化したものと考えられている。住居址外部においては、O火山灰による4号住居址の盛土①、ほぼ同質の3号竪穴の盛土②が明確に認められる。間にはO火山灰が汚れた感じの漸移層が介在する。また、竪穴内部にもO火山灰が堆積している。これは、屋根に盛った土が流入したものと理解される。中には若干の木炭片を含んでいた。壁際においては、黒色土③ないし暗褐色土のブロック④がはさまれていたり、あるいは床面に堆積している状態が一部確認できた。また、竪穴外部（東側）の盛土②の一部には、カマド址に伴なうと思われる白灰が見られる。

なお、2号址と3号址間の南北セクション（第4図7）を観察すると、3号址の盛土②は2号址の盛土⑤の上部に堆積している。その下層⑥は⑤に腐植土を若干含んだ

ものである。これらの層位的事実から、2号→3号→4号の順に住居址が構築されたことを理解できる。

遺構：完掘後は、長径6.8m、短径6.3 mの方形を呈している（第8図）。壁高は、旧表面からは50～60cmであるが、盛土の厚さを加えると、80～100cmの高さを計る。長軸方位はN27°E。

柱穴と思われる pit は、周壁沿いにやや規則的に見られる。それらは径5～12cmであり、深さは5～26cmである。径8cm、深さ15cm程度のものが多く、先端は尖ったV字形の断面の場合が大半である。主柱穴と考えるべきものは四隅より若干離れて位置している。径20～30cmであるが、深さは比較的浅く、北21cm、西30cm、南12cm、東9cmを計るのみである（第3表）。

カマド址が南東壁のほぼ中央部に認められた（第9図）石組みのものと思われ、砂岩の平石を含む4個の自然石が残存していた。断面は、壁を若干掘り込んでほぼ直角に立上がり、煙道部が斜上しているものである。煙道の長さは略80cmである。層位図に見られるように、煙道部はW火山灰をわずかに含む白灰①の部分に相当すると思われ、外側には盛土②と白灰③が見られる。純粋な焼土

の部分④とその周囲の木炭を含む焼土の部分⑤が 110×65cmの範囲に広がっている。カマドの石は、茶褐色土⑥の上部に位置している。1 個体分の擦文土器もこの⑥の上部に乗っていた。

このカマド址の南側の床面には、壁際に細長い低いベンチ状の部分が確認された。さらに壁の点部を穿って外側に延びる舌状部が発見されている。幅70cm、長さ 180cmを計る。その形状から見て出入口部を想定することができる。

住居址外部に102個の大小の柱穴様 pit が検出された。住居址の壁に近くほぼ平行して位置するものもある。北東壁中央部、南西壁よりやや西寄り、南東壁舌状部付近にやや集中傾向が見られる。

遺物：唯一の擦文土器がカマド址付近から出土している。前述の如く、床面上の茶褐色土に乗っていたが、カマドを構成する自然石と同一レベルであり、住居址に伴うものと考えてよい。この擦文土器に付随してカワシシジュガイ科の殻片が1片出土した。同じものは、カマド址の北側でも1 個体分2枚検出されている。その位置より東側にある3 個の小 pit の中央の pit からはウバガイと思われる小殻片が出土している。煙道部のW火山灰を含む白灰の中からは鉄器片が1 個出土した。また、特筆すべきものに粘土塊がある。それは南西壁中央よりやや西側に位置するpit (44×39cm、深さ25cm) の中に置かれた。2 個並列して出土したが、ともに稜に丸味がある立方体に整形されている。それぞれ、21×13×10 cm、6.4kg、18×10×10cm、3 kgである。以下にこれらの簡単な紹介をしよう。

擦文土器 (第17図1)

口径26.5cm、底径8.5cm、高さ26cmの深鉢形で、ほぼ完全に復元できた。器厚は8mm程度で、内部は黒色でよく研磨されている。補修孔が2 対観察される。

鉄器 (第13図4)

幅2.5cm程の鉄器片で、一端は折曲ったまま錆付いている。他端には径3mmの目釘孔が残っている。おそらく山刀(タシロ)の基部と思われる。尚、覆土中より、85g、安山岩、35g、安山岩、110g、砂岩の石錘が出土した。

(第33図7、9、11)

(宇田川 洋)

第3表 3号住居址内外のPit

№	径cm	深さcm	№	径cm	深さcm
1	24	-9	6	10	-17
2	26	-12	7	10	-10
3	30	-30	8	14	-21
4	20	-21	9	8×5	-12
5	10	-15	10	8	-10

№	径cm	深さcm	№	径cm	深さcm
11	10	-8	71	10	-19
12	8	-9	72	8	-12
13	8	-14	73	7	-7
14	8	-12	74	20×14	-15
15	8	-18	75	10	-18
16	10	-17	76	12	-16
17	8	-19	77	10	-18
18	8	-14	78	10	-16
19	10	-11	79	8	-17
20	10	-17	80	10	-14
21	12	-10	81	10	-18
22	10	-26	82	32×18	-25
23	8	-7	83	10	-12
24	8	-23	84	18	-12
25	7	-20	85	10	-16
26	5	-5	86	8	-11
27	11	-18	87	10	-13
28	8	-19	88	8	-12
29	10	-15	89	10×12	-15
30	18	-15	90	12	-18
31	12	-16	91	18	-26
32	8	-19	92	8	-17
33	8	-14	93	8	-13
34	7	-11	94	16	-10
35	6	-11	95	22	-20
36	8	-19	96	9	-13
37	14	-4	97	10	-15
38	9	-19	98	11	-16
39	14	-20	99	10	-18
40	10	-24	100	10	-16
41	10	-19	101	10	-12
42	10	-10	102	10	-17
43	10	-15	103	11	-18
44	10	-13	104	15	-13
45	10	-11	105	7	-13
46	10	-12	106	7	-15
47	8	-13	107	10	-16
48	10	-20	108	10	-10
49	40×32	-36	109	8	-21
50	12	-12	110	8	-11
51	12	-15	111	22	-16
52	14	-13	112	10	-19
53	23	-20	113	10	-13
54	8	-14	114	9	-22
55	10	-10	115	10	-12
56	10	-11	116	8	-14
57	12	-20	117	15×17	-46
58	15	-22	118	12	-17
59	14	-11	119	15	-22
60	8	-16	120	25	-17
61	10	-14	121	7	-5
62	16	-8	122	10	-7
63	13	-14	123	10	-15
64	15	-12	124	10	-14
65	10	-18	125	10	-12
66	9	-17	126	9	-12
67	10	-14	127	12×10	-13
68	9	-11	128	7	-7
69	8	-15	129	7	-14
70	10	-15	130	9	-15

4) 4号住居址

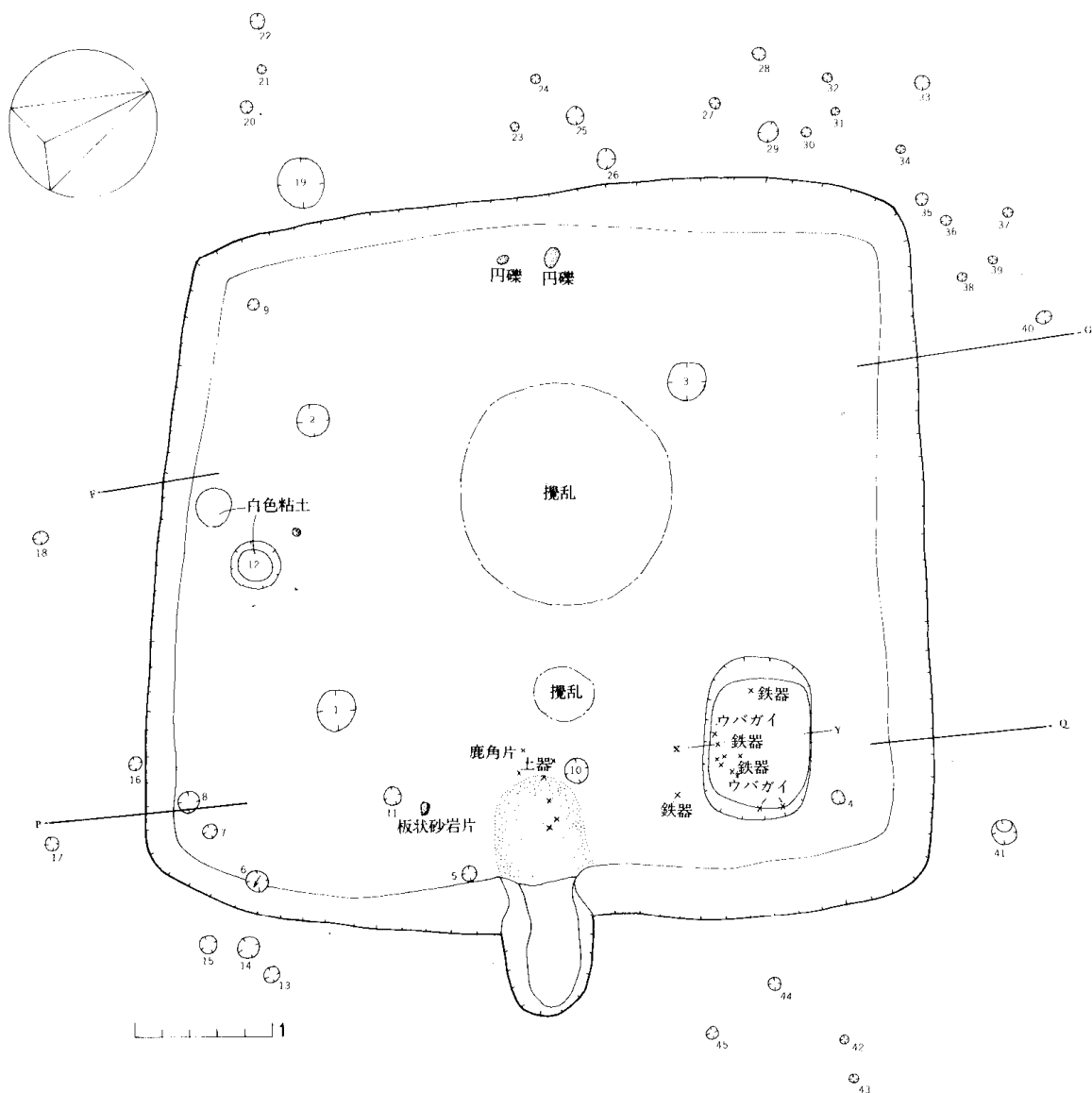
層位：住居址中央部に径 1.6m の近代の掘り込みがあり、これは床面まで達していた。⑩はその際に盛られた土である（第4図）。第Ⅰ層は本来の表土。第Ⅱ層は白色火山灰を混えた褐色土層。第Ⅲ層は暗褐色土層。第Ⅳ層は橙色火山灰を主体とする層で、壁面近くに厚く、中央部に薄い。床面の一部は本層が堆積せず、直接上層の第Ⅲ層が床面を被っていた。第Ⅳ層中には厚さ 1cm 内外の黒色土①を含む部分もある。本住居址の盛土が流れこんだと思われる。床面は肌色火山灰層（第Ⅴ層）を掘り込み、火山灰（第Ⅵ層）を表面としているため堅くしまっており、水はけはよい。

住居址外では次のような堆積がみられた。②は5号住居址の盛土、橙色火山灰で4号住居址のそれより黄色味

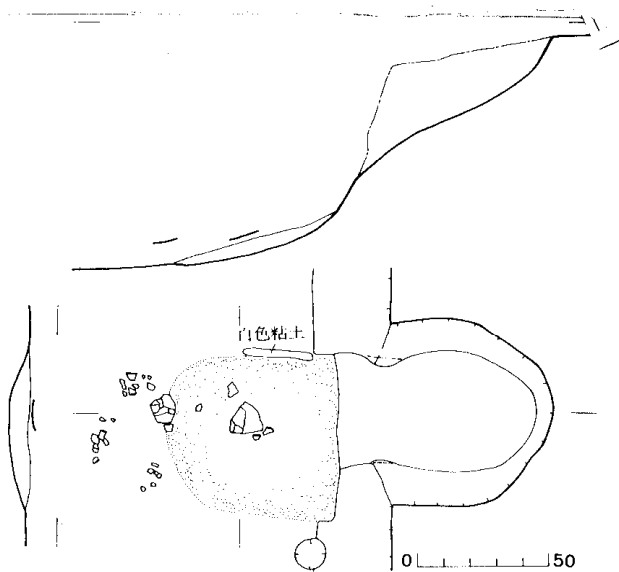
を増す。③は褐色土層。④は4号住居址の盛土と考えられる橙色火山灰、第Ⅳ層とはほぼ同じものである。この盛土の重なり合いから、5号住居址は4号住居址よりも遅くつくられたものと判断される。同様なことは本竪穴から離れた地点でも、確認された。⑥は3号住居址の橙色火山灰で、⑤は④と⑥を分けるやや汚れた橙色火山灰の漸移層である。⑦は旧地表面をなしていたと思われる黒色土層。

なお、4号住居址は縄文早期のJ-3号住居址を切って構築している。⑧~⑪はその内部に堆積した層の一部である。⑧は橙色火山灰層、⑨は黒色土層、⑩は肌色火山灰を主体とする層、⑪は暗褐色土層である。

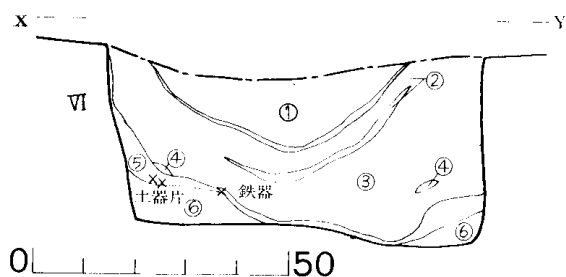
遺構：長軸方向がN 27° Eで 5.7×5.1m ほぼ隅丸方形の竪穴住居址であるが（第10図）、西隅がやや不正形となっている。壁高は旧表面より垂直に北東壁で80cm、



第10図 4号住居址平面図



第11図 4号住居址のカマド址

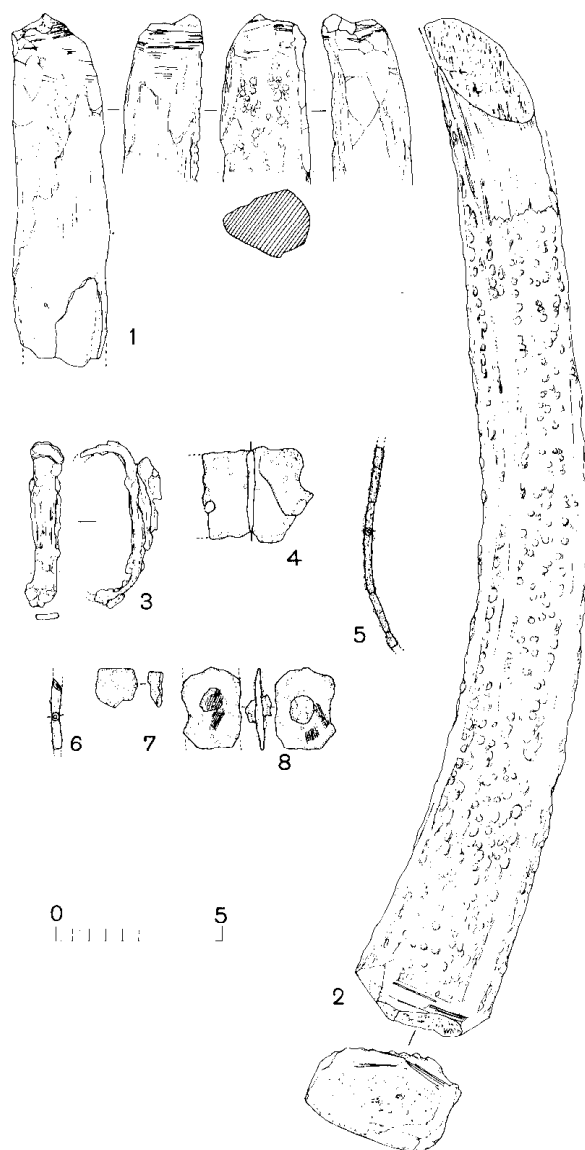


第12図 4号住居址内遺構断面図

南西壁で50cmを算し、30cmの差をもつがこれは、傾斜地にあるためで、床面はカマド付近の僅かな盛り上り以外は水平に近い。

柱穴状の pit は床面に12個、住居址外33個あり（第4表）、カマド址は、床面に60×60cmの範囲に厚さ8cm内の外、焼土がみられ、焼土中には少量の木炭、鳥獸類の小骨片を認めた（第11図）。煙道は壁を掘り込んでほぼ30°の角度で斜上し、幅70cm、長さ70cm、ヒサシ状になった部分の残存状態が確認できた。焼土に接して長さ25cm、幅および厚さがそれぞれ3cmの棒状の白色粘土の塊が検出された。石組はなかった。カマド址から50cm離れた床面に10×10cmの板状砂岩の破片が出土している。焼土直上およびそれに接した床面に内面を表にした擦文土器深鉢の破片が集中して出土し、一部は煙道内からも検出された。これらの土器は、すべて細かな割れ目が入りもろく、胴部以下の無文部を欠いている。また、12の Pit 中および南西壁床面より白色粘土が検出された。

住居址内の特殊な遺構として、東隅床面を掘り込んで120×80cmの隅丸方形の遺構が検出された。この遺構の



第13図 出土遺物 1

1、2、2号址・3、1号址、4、3号址
5～8、4号址

壁は竪穴住居址の各壁とはほぼ平行し、内部の堆積は（第12図）、①橙色火山灰を主体とする層で、住居址床面を被っている第Ⅳ層の一部、②1～2cm内外の厚さを示す褐色土、③橙色火山灰や床面を構成している第Ⅵ層などの混土層、④橙色火山灰のブロック、⑤暗褐色土、⑥第Ⅵ層の再堆積層である。遺物は⑤の層より出土し、鉄器片が3個、ウバガイ3個体分、擦文式土器高杯口縁部破片、深鉢破片などが出土した。深鉢の破片はカマド址より出土した土器と接合し、同一個体である。したがって、この遺構と竪穴住居址との同時性が考えられ、本住居址の付属施設とみられる。他に木炭片が⑤の層中から出土している。

遺物：第17図2はカマド址より出土した深鉢形土器で、この一部破片は住居址内の遺構より出土したものである。実測図は図上復元である。胴部破片以下を欠くが、3号

第4表 4号住居址のPit

No.	径cm	深さcm	No.	径cm	深さcm
1	30	-4	24	6	-10
2	25	-7	25	17	-15
3	30	-7	26	17	-15
4	10	-12	27	8	-27
5	12	-20	28	10	-33
6	14	-14	29	16	-52
7	10	-8	30	6	-13
8	17	-17	31	6	-10
9	7	-10	32	8	-17
10	18	-9	33	10	-14
11	15	-13	34	7	-15
12	38	-8	35	10	-20
13	10	-15	36	7	-12
14	16	-23	37	8	-10
15	14	-20	38	6	-15
16	10	-6	39	7	-20
17	10	-9	40	10	-8
18	12	-6	41	20	-24
19	37	-27	42	7	-15
20	9	-14	43	10	-10
21	6	-17	44	10	-14
22	12	-16	45	10	-12
23	6	-12			

住居址のそれと同じ形態を示すものと思われる。口径32cmを算する。

第17図4、5は住居址内遺構より出土した高杯の口縁部破片で、羽状の短刻線を配している。6も同じ。

鉄器としては住居址内遺構付近の床面より長さ5.5cmの針状のものが3本に折れて出土している（第13図5）。中空で径は1.5mmである。6～8は遺構内出土で、6は径1.8mmで中空である。8は刀子の茎の部分で目釘が残っている。幅17mm、厚さ2.5mmで木質部の痕跡が観察される。7は鉄片であるが正体不明。他にカマド址付近床面から風化の激しい鹿角片が、また北西壁際の床面より硬質砂岩の円礫2個が出土した。自然遺物としてはさらに遺構内からウバガイが出土したことは前述した。また覆土中より砂岩質50gの石錘（第33図6）が出土した。

（山本文男）

5) 5号住居址

層位：第4図に示した様に層序関係は以下の如くであ

る。第I層は表土で、9～20cm。発掘前の所見によれば、ほぼ中央部に径70×40cm、深さ50cmで床面に達する最近の掘り込みがあり、二次堆積土が表土中に存在するが明確に区別されない。よってこの層は二次堆積土も含むものとする。第II層は、白色火山灰で4～16cm。住居址全体に広がる。第III層は、茶褐色土で8～10cm。住居址外部（北側）に認められる。第IV層は、黒色土で4～28cm。中央部より北側で、床面を12cm近く掘り込んでおり、その部分では橙色火山灰と混在している。この層の上部より掘り込んで竪穴住居址は構築されている。第V層は、暗褐色土で、住居址外部（北側）と、南側壁面付近に認められ、第III層と同様に、中央部には存在しない。第IV層は、橙色火山灰で漸次変化し下部では肌色となる。盛土は、第4図に見られるとおり4号住居址の盛土②の上部に本住居址の盛土①が認められ、4号住居址との関係は明らかであるが、6号住居址との新旧関係は、盛土によって明確に把握することはできなかった。最大値20cm。

遺構：住居址の壁面は第IV層とした黒色土の上部より掘り下げられており、壁面の高さは、50～70cmを計る。完掘後のプランは、南北方向の短径4.6m、東西方向の長径4.9mの方形を呈し、長軸方位はN75°Wを示している。

床面は、ほぼ中央部から北壁の間は若干（8cm程度）窪んでいる。柱穴様のピットは竪穴内部で8個、外部で1個、その他用途不明のピットが住居址外部で2個検出された。ピットの大きさ、深さは第5表参照。

住居址内部の柱穴様ピットは、径、深さ共に10cm前後のものが多く、北東隅においては検出されなかった。

出入口と推察される舌状部が中央部よりやや南側の東壁から外側に延びており、幅70cm、長さ2m10cmで、床面からの高さは40cmを計る。

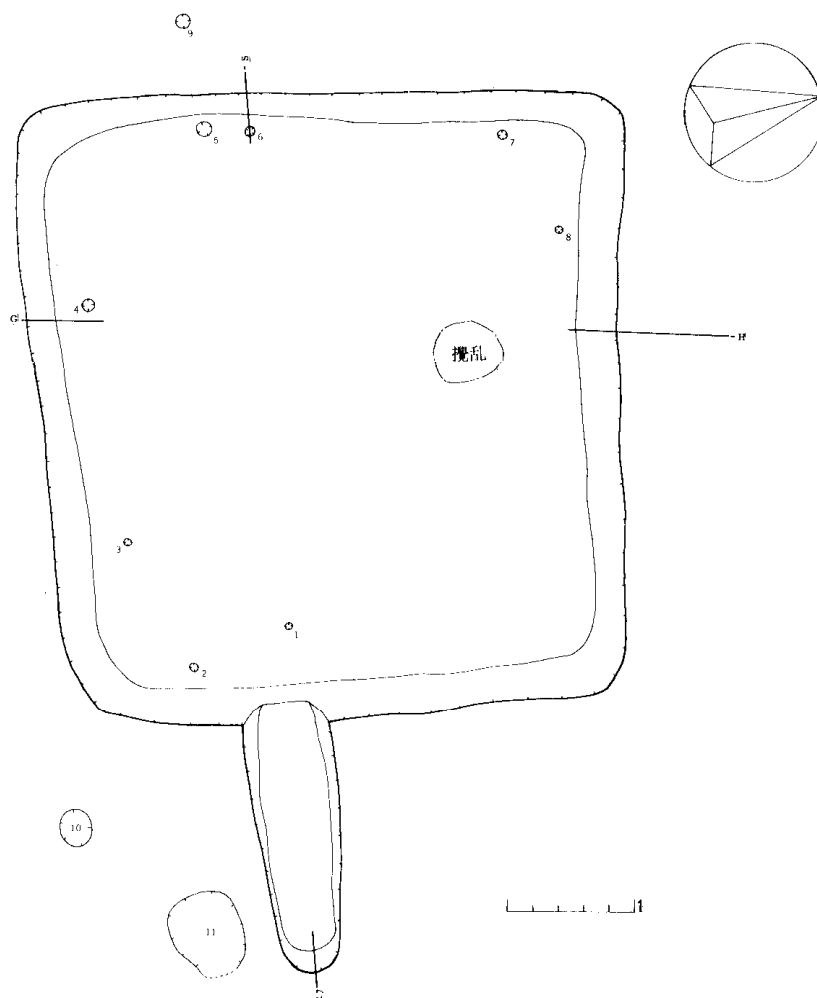
炉址・カマド址は、確認されなかった。

遺物：住居址覆土中から擦文土器口縁部4～5片が出土したのみである。復元過程において、2個体分であることが確認された。第17図7、8ともに口縁部のつまった器形である。7は、口縁から56mmで頸部に到りくの字状外反する。頸部より2～3mmにおいて長さほぼ4cm程度の刻文が縦走し、その下に2本の刻文が横走する。8は、7と同じ様な器形を呈しているが、口縁下部にわずかに刻み目が施されているが定かでない。また、住居址外田表土より石錘（第33図8）が出土している。長軸形態をもち砂岩質。60g。同層中より蛇紋岩製磨製石斧（第33図12）が出土した。刃部を残して破損している。

（松田 猛）

第5表 5号住居址のPit

No.	径cm	深さcm	No.	径cm	深さcm
1	6	-13	2	7	-10



第14図 5号住居址平面図

№	径 cm	深さ cm	№	径 cm	深さ cm
3	6	-13	8	7	-11
4	10	-6	9	11	-6
5	12	-8	10	30×25	-10
6	9	-8	11	70×55	-11
7	8	-23			

6) 6号住居址

層位：やや歪んだ方形を呈する本住居址は中央部に径2 m内外の最近の pit ((第15図)1点鎖線の部分) が掘られ、部分的には床面下に達している(第14図)。そのため、この pit にともなう二次堆積土が竪穴の東西を結ぶ対角線の南側に多くその最大値は厚さ40cmに達していた。したがって本来の表土第Ⅰ層は、この二次堆積土の下層にあり、厚さは20～8 cmであった。

第Ⅱ層は白色火山灰、厚さ10cm、竪穴中央部と竪穴外に認められた。第Ⅲ層は火山灰混りの暗褐色土層、中央部で消える。厚さ20cm。第Ⅳ層は黒色土層で、旧地表面である。本住居址はこの面より掘り込まれている。

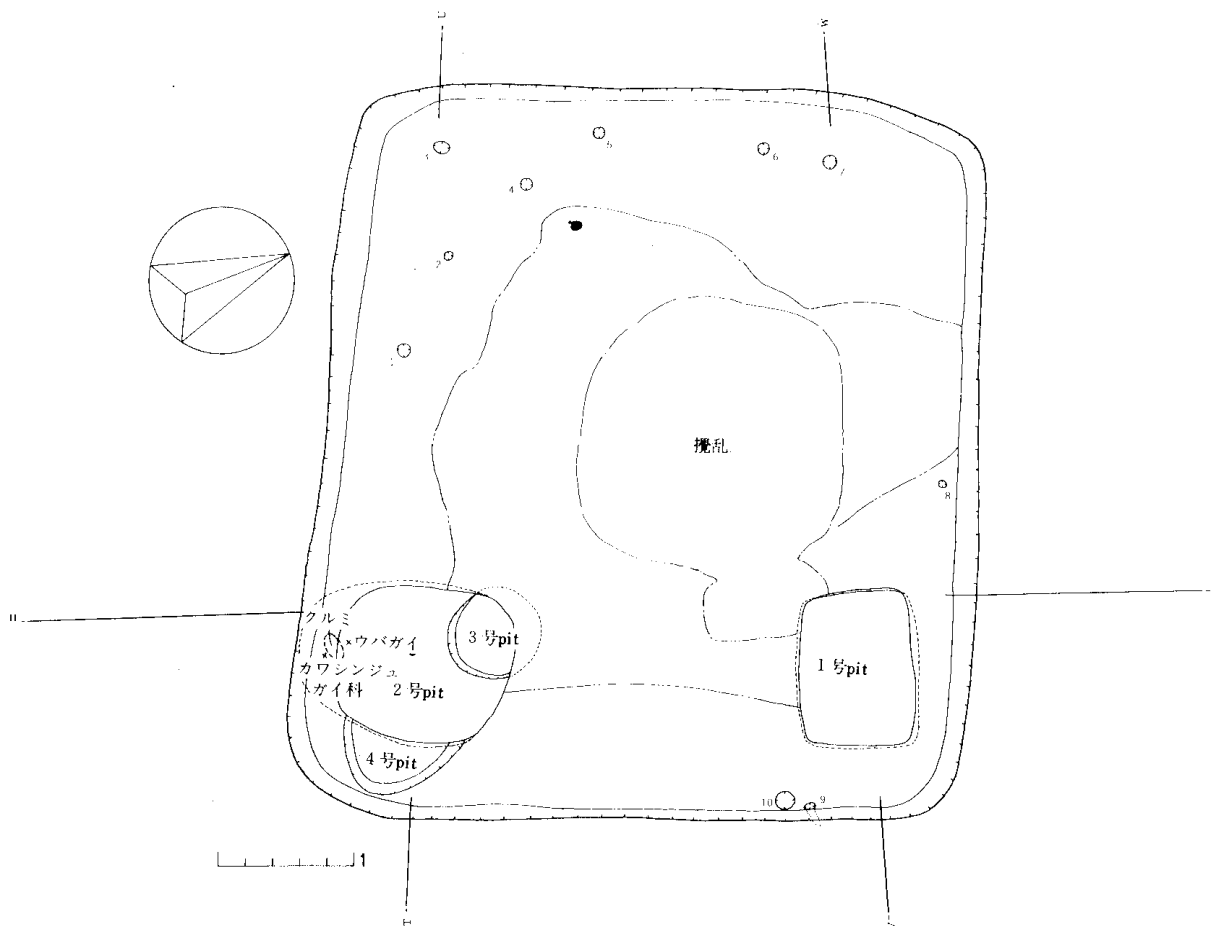
第4図の層位図でも明らかなように、住居址外に厚さ20cm、幅2 mに亘る①としたローム状火山灰の盛土が第Ⅲ層と第Ⅳ層との中間に介在する。第Ⅴ層は暗褐色を呈

するローム質粘土であり、その下層に地山の第Ⅵ層がある。基本的には、本住居址の層序は以上のⅥ層である。壁沿いになだれ込んで堆積する覆土については③が周壁にみられる。⑤は黒褐色土、⑥暗褐色土は、多くは北壁に集中する。住居址外の盛土は東側が高く、西側が低いという地形上の理由から、西側に厚い。④は本住居址構築以前のもので、⑧は本住居址破棄ないし倒壊直後の堆積と考えられる。

遺構：完掘後のプランは4.8×5.2mのやや歪んだ方形を呈する。長軸方位はN 47°Eを示す。中央部から東壁寄りには本住居址構築以前の遺構があった。そのため④とした黒色土上面を床面としている。北壁の高さ35cm、南壁の高さは55cmを計る。

第Ⅱ層の白色火山灰層下の、⑧とした黄褐色粘土層中に、径43×40cm、厚さ6 cmの、レンズ状の焼土があったが、これは後世のものである。カマド址については、東壁を丹念に調査したがなかった。

柱穴は10個確認した。いずれも壁沿いに並ぶ。№2と4は若干内側に入る。主柱については④の黒色土層上面



第15図 6号住居址平面図

が東壁近くで床面を形成し、他の面は最近の攪乱を受けているため確認できなかった。10個の柱穴の内一25cmを算し、45°の斜角を有する№9のpitは注目される。南壁の西隅に検出された№1～5のpitは先端を尖鋭にした棒を突きさしたものである。各pitの計測値は別表の通りである（第6表）。

柱穴以外の遺構として、住居址の東北隅と南隅に貯蔵穴様の大pitが発見されている。東北隅に位置する1号pitは住居址の壁に平行し、隅丸の長方形を呈する。プランは120×85cm、深さ50cmで床面から掘り込まれている。出土遺物はない。2号pitは既に存在した4号pitを切って掘り込まれていた。3号は後世の掘りこみである。南壁側は袋状を呈し、若干の傾斜をもっている。口径120×125cm、底径155×120cm、深さ70cmを計る。隅丸の方角を呈する。3号pitは60×78cm。

本住居址構築以前の遺構は、北壁外より続き、西壁より1.4m、幅60cm、深さ35cmの落ちこみがあつた。その他中

央にも浅い落ちこみが認められたが、日程の都合で追求できなかった。

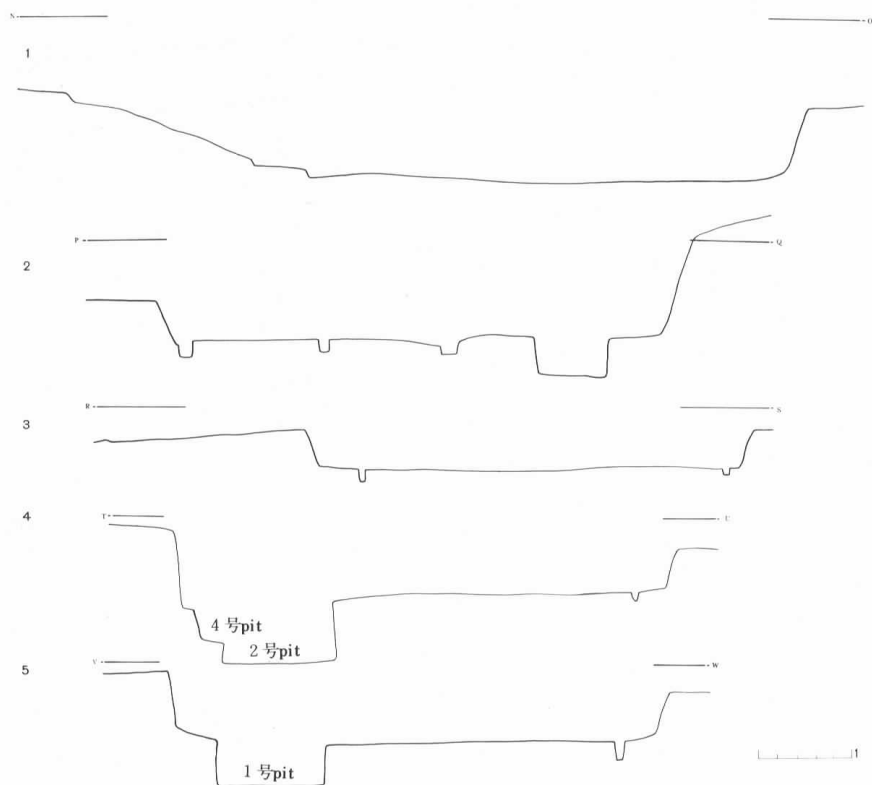
出土遺物：2号pitよりクルミ様の炭化物を1個とり上げた。他にも数例認めたが、同様の細片である。また同じく2号pit底面より、カワシンジュガイ科の1種とウバガイがそれぞれ1個ずつ出土している。

土器は東側の盛土を剥土中に1点、(第17図9)、第IV層から出土したとみられる擦文土器の小片がある。

(山崎 哲)

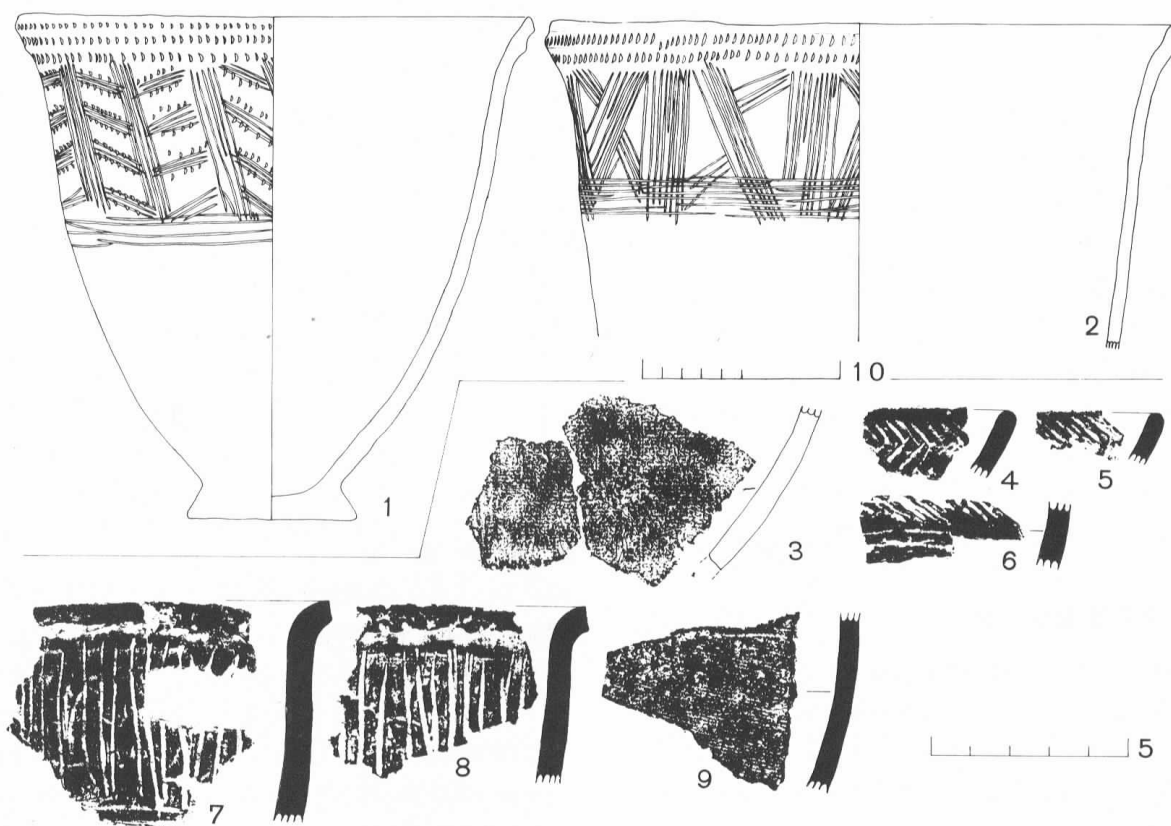
第6表 6号住居址内のPit

№	径 cm	深さ cm	№	径 cm	深さ cm
1	10	-4	6	10	-11
2	8	-9	7	11	-11
3	10×13	-9	8	6×7	-20
4	9	-24	9	8	-25
5	10	-23	10	15×13	-7



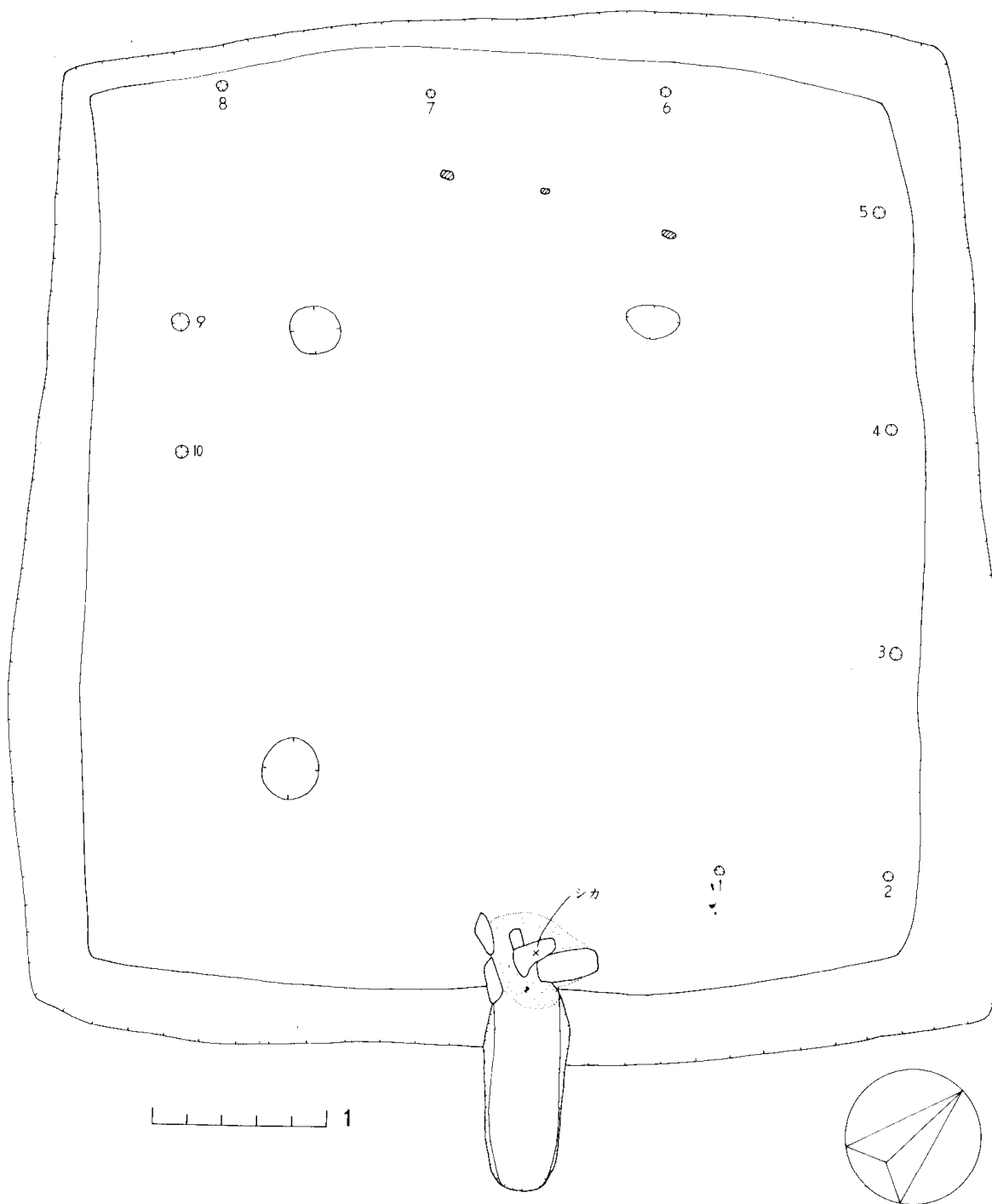
第16図 竪穴住居址の断面図

1、3号址・2、4号址・3、5号址・4、5、6号址



第17図 出土遺物 2

1、3号址・2、4、5、6、4号址3、2号址7、8、5号址・9、6号址



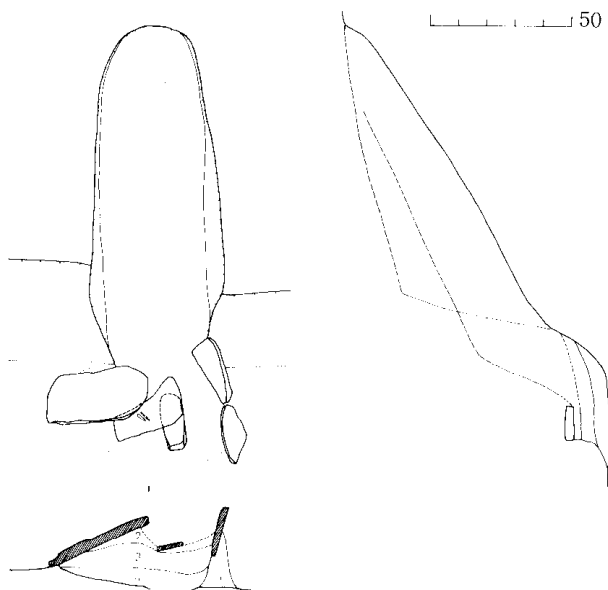
第18図 7号住居址平面図

7) 7号住居址

層位：住居址のほぼ中央部に当る北東—南西方向のセクションによると、つぎのような層序関係を示している（第20図参照）。第Ⅰ層は表土であり4～20cmを計る。第Ⅱ層の白色火山灰は、壁面立ち上がりの上には堆積しないかあるいは認められてもごく薄いものである。住居址外部では2～7cmであるが、内部にあっては厚い部分で18cmほどを計る。その下層には、北東側の住居址外

部において盛土（黄褐色火山灰②）と旧表上面に相当する暗褐色土（第Ⅲ層）が堆積する。しかし、南西部外側においては第Ⅱ層の白色火山灰を含む暗褐色土①が10cmほどの厚さで堆積しており、盛土②がその下層に位置する。盛土の厚さは30cmほどを計ると思われる。竪穴外部における自然堆積の第Ⅳ層は橙色火山灰層であり、30cm位で淡灰色の第Ⅴ層肌色火山灰層に至る。住居址の床面および壁面の下部はこの肌色火山灰層をも掘り込んで形成している。

竪穴の内部においては、第Ⅱ層の白色火山灰の下部に



第19図 7号住居址のカマド址

その火山灰を含むやや硬質の暗褐色土③が約20cmの厚さで堆積している。住居址中央部ではそれが床面の直上にのっている。また、壁面近くでは、黒色土④が流入した状態で観察される。おそらく旧表土面からの流れ込みと考えられる。北東部においては、その下層に火山灰を含む赤褐色土⑤が堆積し、炭化材および小形の自然石を若干混入している。同層は壁面近くでは上層との境界が不明確となる。壁際の床面直上には赤褐色土⑦がのっている。南西部の状態はつぎのように観察できた。すなわち、旧表土面の流れ込みと考えられる暗褐色土④は黒味を帯びかつ白色火山灰を若干混入する。その上部には盛土②が流れ込んだと思われる黄褐色土に黒色土を混入した土層が堆積している。また、下層には第Ⅳ層としたものがわずかに流れ込んでおり⑤、さらに黒色土に火山灰を含む層がある。これは住居址内側における肌色の火山灰に連続しており、前記の⑥に相当すると思われる。さらに、黒色土④、赤褐色のやや軟質な小ブロック状に堆積した層⑦が存在する。

遺構：住居址の壁は、第Ⅲ層の暗褐色土層より掘り込まれており、第Ⅴ層の火山灰層まで達している。その深さは60～80cmを計り、盛土の厚さを加えると壁面の高さは約1mとなる。

完掘後のプランは方形を呈し、北東－南西方向5.5m、北西－南東方向6mを計る（第18図）。長軸方位はN49°Wである。

南東壁のほぼ中央部に砂岩を主体にした石組みのカマドが構築されていた。5個の砂岩をもって作られており、右袖の2個は立っているが、左袖の3個は倒れた状態で検出された。これらの砂岩は床面上の赤褐色ロームの上に築かれていたと思われる。それは右袖において顕著であ

り、木炭を含んでいる（第19図①）。左袖下部では、肌色を帯びる灰層②、白色の灰層③が堆積し、さらに真赤な焼土④が9cmの厚さでレンズ状に堆積していた。煙道は壁面の立ち上がり部分でやや傾斜を強めるが、続いてゆるい勾配で斜上する形態をとる。約105cmの長さを有している。なお、炉址は検出されなかった。

柱穴は直径30cm前後の4本柱を基調とする形態をとると思われるが、東隅の1個は確認し得なかった。北隅のものも浅く7cmを計る程度である。西隅・南隅が深くそれぞれ17cm・37cmの深さである。ほかに壁沿いに10個の小

第7表 7号住居址のPit

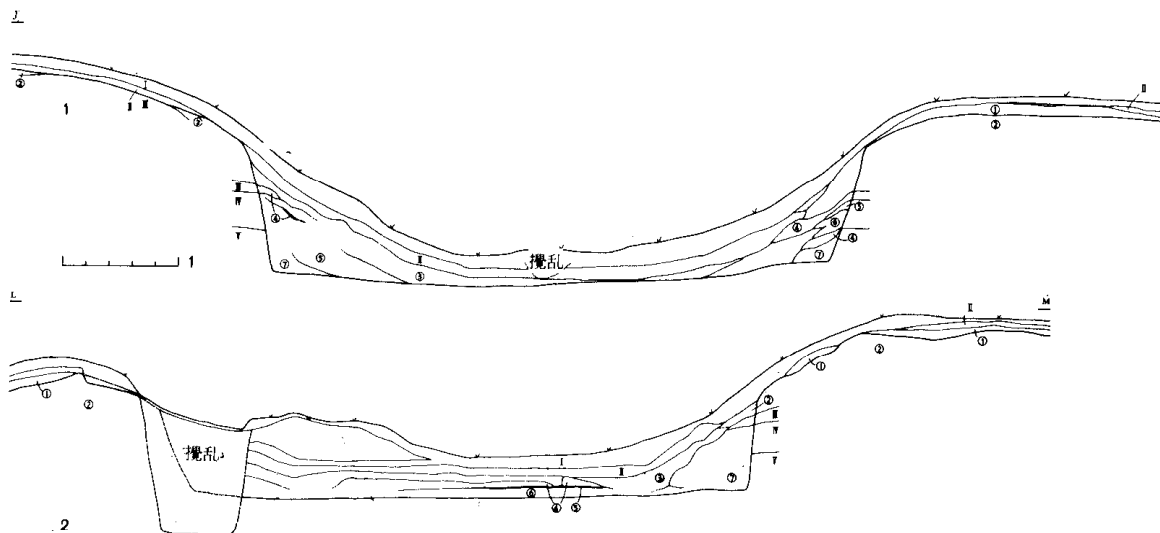
№	径cm	深さcm	№	径cm	深さcm
1	6	-16	6	6	-12
2	7	-13	7	5	-14
3	7	-11	8	6	-7
4	7	-14	9	10	-18
5	8	-13	10	8	-13

pit が検出された。大きさ・深さはそれぞれ別表の通りである。これらの小 pit は、北東壁沿いで比較的、規模・配列に規格性を認めることができる。また、南西壁沿いでは9・10の2個のみで他には認められない。このことはあるいは4本柱の在り方と関連があるのかも知れない。つまり、東隅に存在するはずの主柱の1個と北隅の浅い1個は、北東壁沿いの4個の支柱によって支えられる上屋構造を堆定できる。

遺物：床面からの出土遺物はきわめて乏しく、若干の炭化材と自然石があるのみである。カマド址に使用された左袖の砂岩の下部に若干のエゾシカの四肢骨片が出土したがほかに文化遺物は検出されなかった。なお、住居址外部のカマド址の南側からも、第Ⅲ層の旧表土面上部にエゾシカの四肢骨の一部が出土している。（宇田川 洋）

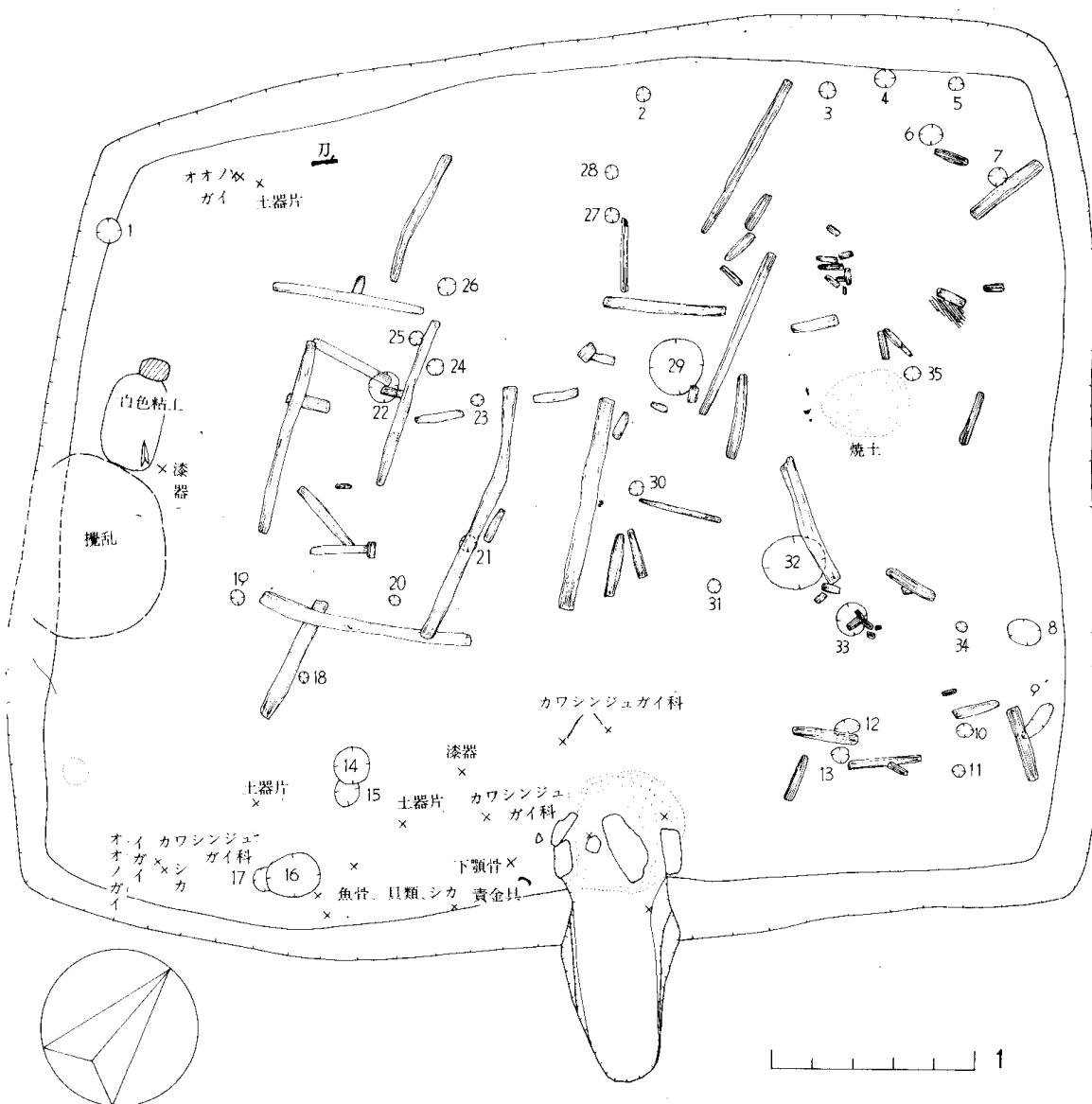
8) 8号住居址

層位：住居址のほぼ中央部の南西－北東方向のセクション（第20図）によると、第Ⅰ層は表土で6～10cm前後。南西部ではこの第Ⅰ層の上部に第Ⅳ層の橙色火山灰を主とする2次堆積がある。第Ⅱ層は白色火山灰で7～10cm。住居址外部ではこの層の下に白色火山灰を含む暗褐色土の薄層①が認められ、その下部に住居構築の際の盛土②がある。これは住居址の内部にも流れ込んでいる。住居址外側では、盛土の下に第Ⅲ層の暗褐色土があり、住居の壁際では若干内部に傾斜して流れ込んでいる。厚さ10cm前後である。第Ⅲ層の下には第Ⅳ層の橙色火山灰が続く。25cmほどの厚さで第Ⅴ層の火山灰層となる。本住居

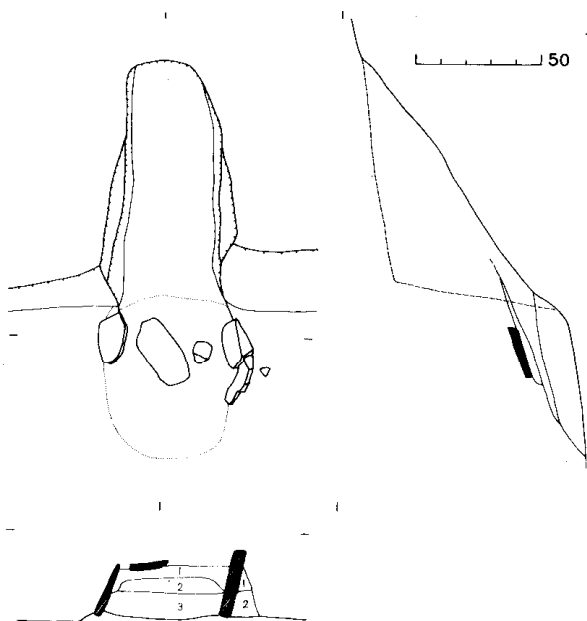


第20図 竪穴住居址の層位図 2

1、7号址・2、8号址



第21図 8号住居址平面図



第22図 8号住居址のカマド址

址はこの層中に床面をもっている。

住居址中央部では、盛土の流れ込みの延長がやや黒味を帯び ③、赤褐色土のブロックが含まれる。この下に炭化材がほぼ水平に検出され ④、さらに厚さ7cm、前後の暗黄褐色土⑥が続き床面に至る。床直上には、部分的に暗褐色の薄層が覆っている。

覆土内の炭化材は多量に含まれており、北東部壁際、西隅・南隅付近には焼土があった。

遺構：住居の壁は第Ⅲ層上部より第Ⅴ層にまで掘り込まれており、65cm前後を計る。盛土の厚さを加えると90cm～120cmほどの壁高となる。そのプランは、北東―南西方向に長軸をもつ、ややいびつな方形を呈している。5.2m×4.2m。長軸方位はN47°Eである(第21図参照)。

南東壁の中央よりやや北東寄りの位置に石組みのカマドが構築されていた(第22図)。内部は、上部に灰①があり、暗褐色土②を介在して焼土③となっている。焼土上面および上部に禾本科植物の茎を混入した痕を残す粘土の小塊、小片となった木葉底の擦文式土器底部(第23図2)などが出土している。カマドの構築の補強に用いられたものと思われる。煙道は壁より約80cmの長さで斜上する形態をとる。

ほぼ中央部には薄い焼土をわずかに認めたが、明確なカ址といえるものではない。

pit 35個を検出したが、主柱穴となるようなものは見当たらない。径・深さなどは別表の如くである(第8表参照)

なお、住居址南西壁際の小範囲に白色粘土の塊が認められた。

遺物：覆土中からは、住居の屋根材に使用したと思わ

第8表 8号住居址のPit

No.	径cm	深さcm	No.	径cm	深さcm
1	12	-2	19	7	-8
2	8	-4	20	5	-2
3	8	-4	21	8	-7
4	9	-6	22	15	-3
5	7	-5	23	7	-3
6	12	-12	24	8	-6
7	9	-10	25	7	-4
8	18×14	-5	26	9	-10
9	23×7	-6	27	8	-21
10	8	-11	28	7	-8
11	7	-7	29	28	-10
12	12×8	-9	30	8	-9
13	8	-12	31	6	-7
14	18	-18	32	30×26	-6
15	13	-3	33	17×15	-12
16	27×20	-11	34	6	-6
17	11	-6	35	8	-7
18	6	-2			

れる丸太材・板材が出土し、それらの上部にヨシの類をふいていた痕跡が一部に炭化物として認められた。さらにカマドの前に当る位置に小石の集積があった。

床面からは以下の遺物を見出した。

刀(タシロ?) 目釘・木質部の痕跡をみるもので、2点出土している(第24図2～4)。3・4は同一個体と思われる。北西壁際より出土した。

黄金具 カマドの南側灰層上より出土(第24図1)。

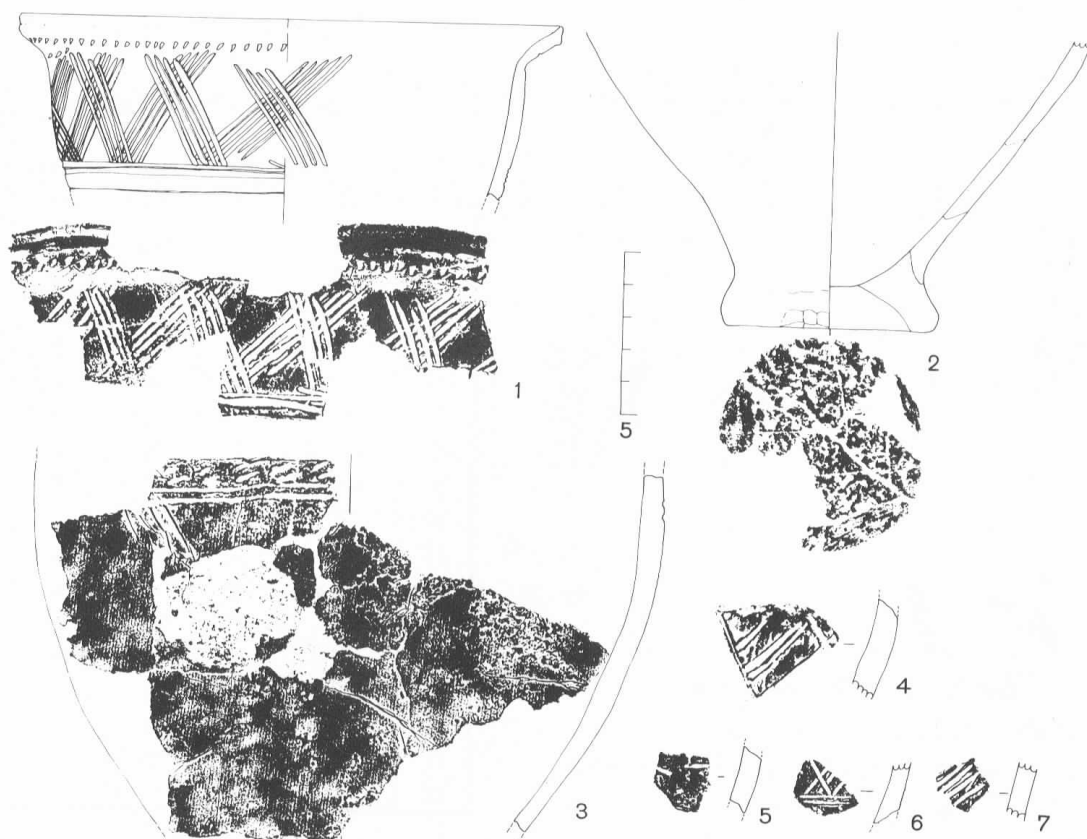
擦文式土器口縁部 カマドの南側南東壁寄り出土した。復原図(第23図1)によると、口径17cm弱を計る。文様は、口唇部外側に浅い1条の刻線文が横環し、その下部に短刻線文を周らしている。さらに右上―左下の5本単位の刻線を施し、それに右下りの4本単位の刻線を重ね、横位の2～3条の刻線で画している。

擦文式土器胴部 カマドの南側より出土。3本の横位の刻線が認められ、その間に短刻線文を2段施してある(第23図3)。

擦文式土器底部 木葉痕のある底部のはり出しが著しいものである。筥による器面調整が施されている(第23図2)。

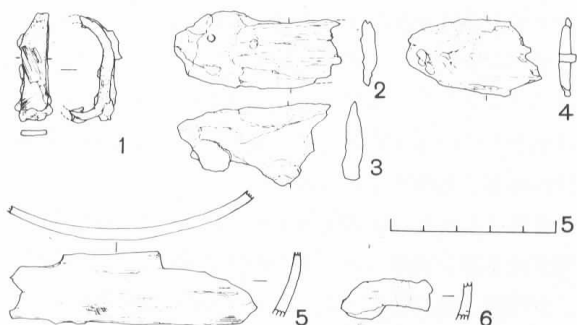
擦文式土器小片 カマド内部と南側で、南東・南西壁寄りの位置から出土している(第23図4～7・第21図の×印)。

漆器片 2点出土しているが、大形の例(第24図5)は直径14cm内外のくりぬきの器物と思われる。表面に黒



1～7、8号址

第23図 出土遺物 3 (8号住居址)



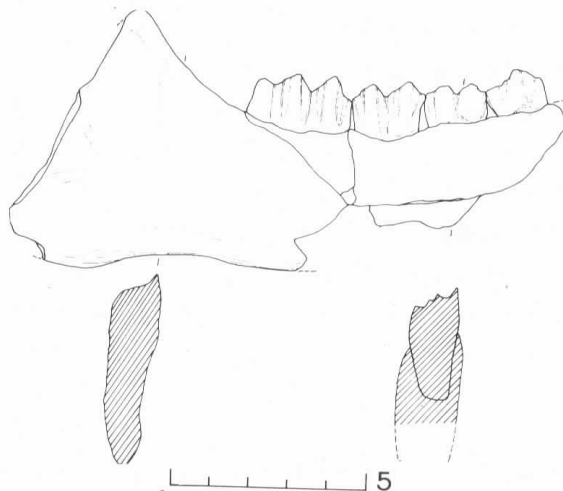
第24図 出土遺物 4 1～6、8号址

色のウルシの痕跡をみる。小形例(第24図6)は黒地に赤色の文様の一部かと思われるウルシ塗りが認められる厚さはいずれも3mm前後である。

自然遺物 カマドの南側に接する位置で、エゾシカの左下顎骨(第25図)、同肢骨片、魚骨の類、アサリ2個体、オオノガイ1個体、イガイ(sp.)細片、エゾタマキビ6個体、その他、カマドの周囲3ヶ所よりカワシンジュガイ科の殻が出土している。

また、住居址西隅付近より、オオノガイ細片、南隅付近よりエゾシカの四肢骨片、種名の不明な小骨3個、オオノガイの完形1個および細片、イガイ(sp.)細片、カワシンジュガイ科の貝殻が出土している。

なお、取り上げることができなかったが、南西壁際の白色粘土塊の近くに獣骨が出土している。(大沼忠春)



第25図 出土遺物 5 (8号住居址)

4. 発掘区の調査概要

1) 第1発掘区

住居址外の遺構をとらえるために7号住居址と8号住居址の間に発掘区を設定し、第1発掘区とした。層位は第1層が表土、第II層が白色火山灰層、第III層が暗褐色土層、第IV層が疑似橙色火山灰、第V層が、橙色火山灰層である。ところどころ第1層が削られ、第II層白色火山灰層が露出しているところもあるが、第II層以下は何らの攪乱も受けていない。その他7号、8号住居址付近に住居址を造った際の盛土がみられた(第27図)。

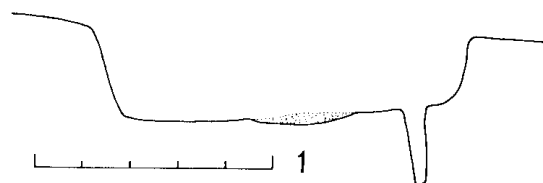
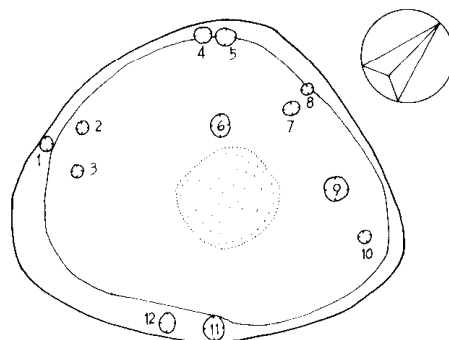
遺構としては8号住居址寄りに小 群が多く検出された(第28図)。また1.6×1.3mの大形の Pit があり、内部に12個の柱穴様 pit が壁際に掘られ中心部に43×40cmの大きさで5cmの厚さをもつ焼土が検出された。(第26図)遺物としては第IV層上から擦文式土器の胴部破片が2点出土したのみであった。なお大形 Pit 内の小 pit に関する計測値は第10表の通りである。(豊原照司)

第9表 第1発掘区のPit

№	径cm	深さcm	№	径cm	深さcm
1	12	-11	26	8	-12
2	18	-19	27	32	-45
3	10	-14	28	9	-14
4	31	-25	29	14	-28
5	25	-33	30	11	-15
6	29×40	-36	31	10	-12
7	17	-25	32	9	-17
8	15	-15	33	9	-17
9	9	-17	34	11	-16
10	6	-18	35	20	-34
11	7	-22	36	8	-13
12	9	-24	37	7	-19
13	8	-19	38	15	-14
14	10	-23	39	11	-15
15	55	-23	40	31	-28
16	9	-23	41	8	-11
17	12	-23	42	9	-18
18	23	-26	43	14	-17
19	10	-20	44	9	-12
20	8	-19	45	35×50	-18
21	9	-13	46	18	-17
22	11	-18	47	20	-13
23	18	-23	48	25	-13
24	7	-13	49	5	-7
25	23	-15	50	5	-7

第10表 第1発掘区大形pit

№	径cm	深さcm	№	径cm	深さcm
1	6	-5	7	7×5	-21
2	5	-5	8	5	-5
3	5	-6	9	11	-34
4	7	-23	10	6	-4
5	8	-10	11	11×9	-21
6	7×10	-6	12	9×7	-19



第26図 第1発掘区の大形Pit

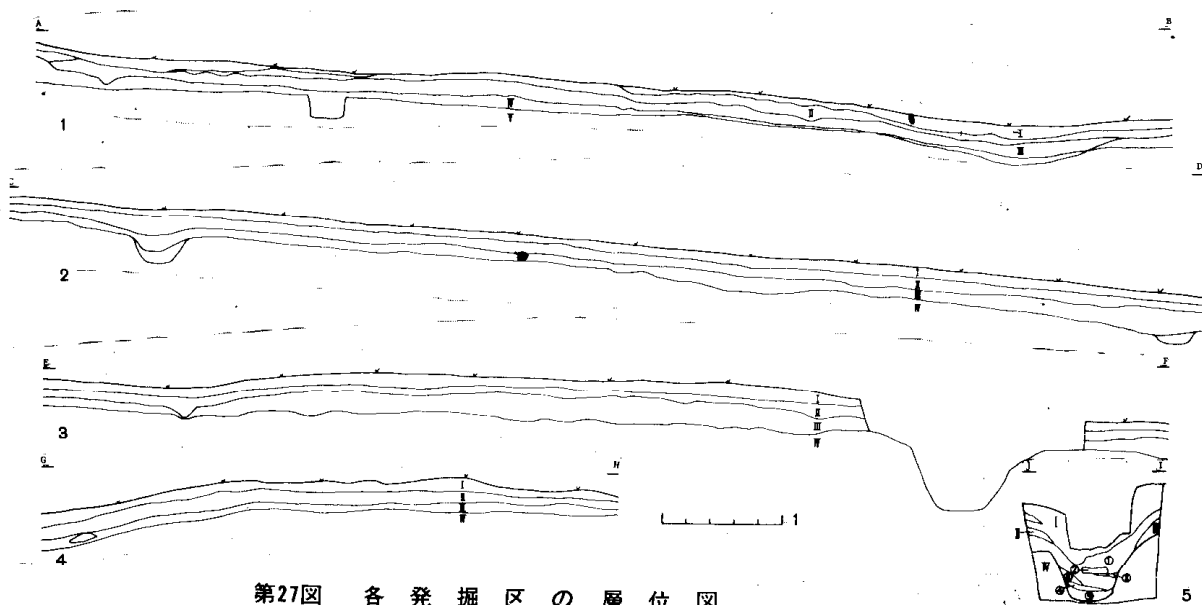
2) 第2発掘区

7号住居址の南西部に設けた発掘区である。標高25～26mで南西方に傾斜している。発掘面積は68㎡。7号住居址の盛土が、発掘区の北側に約2mの幅をもって堆積している。

層位：第I層は表土、第II層白色火山灰層、第III層暗褐色土層、第IV層橙色火山灰層、という層序関係である。厚さは第IV層直上まで25cm程度を計る。各層は略々同数値を示す。

遺構：30個の小 Pit が確認された(第11表)。それらは発掘区北側の7号住居址の盛土から1.5mの範囲に集中している(第28図)。この事実から考えて、これらの小 Pit 中のいくつかは7号住居址に伴う付属施設と堆定することができる。

(山崎 哲)



第27図 各発掘区の層位図

1、第1発掘区・2、第3発掘区A・3、第3発掘区B 4、第4発掘区・5、第3発掘区C

第11表 第2発掘区のPit

No.	径cm	深さcm	No.	径cm	深さcm
1	10	-18	16	7	-24
2	14	-20	17	8	-17
3	11	-13	18	15	-14
4	8	-15	19	10	-15
5	15	-22	20	27	-20
6	14	-30	21	8	-18
7	12	-30	22	21	-24
8	35	-25	23	20	-42
9	18	-30	24	9	-25
10	20	-31	25	31	-17
11	11	-35	26	16	-21
12	5	-8	27	9	-23
13	16	-15	28	20	-16
14	11	-17	29	10	-26
15	16	-14	30	27	-28

3) 第3発掘区

第3発掘区A・B 北西側舌状となっている標高およそ23mの地点に、7・8号住居址に関連した何らかの遺構をとらえるためにA・Bの発掘区を設定し第3発掘区とした。B～Aはゆるやかに傾斜し下は沢となっている。B区西側の層位は第I層が表土、第II層が白色火山灰、第III層が暗褐色土層、第IV層が橙色火山灰層で、この下に暗黄褐色土が若干みられる部分もある。A区の層位は全くB区と変わらないが、一部分に攪乱がみられた(第27図)。

遺構としてはA・B区でpit群が検出されたが、一部木の根の穴か人為的なものか明確に判別することはできないものもあった。しかしB区におけるPit群の中、明確な形でとらえることはできなかったが、2列に並び円形をなすような配列の柱穴状のpitが検出され何らかの遺

構があったように思える。A区でのpit群は東西部に集中していた。また径1.6×1.7mの深さ30cmを計る浅い皿状の大形pitが検出された。pit中には300個程の様に焼けた礫が不規則な状態で並んでいたが、それがいかなる機能をもつものかは判然としない。中央部分に1.25×0.6m・厚さ5cmの焼土がみられた。

A区において長楕円形の1.8×1mで深さ65cmの二段になっているpitを検出し拡張を試みたが、やはり明確な形でとらえることはできなかった(第28図)。その他、A区から沢までV字状に通じている幅70cm程度の濠状のものが検出された。かつて沢に湧水している所があったということであるが、はたしてこの濠状を成すものが何を目的として作られ使われたのか追求を試みた。この濠状のものは層位からして7号、8号住居址と同時期に造成されたものとみてよいように思える。詳細については本発掘区Cの記載にゆずる。遺物としてはB区で直径10cm深さ10cmのpit(第28図26)より禾本科の植物の実が検出されたのみである。pit内の土を含む総重量は100gである。

(山崎 哲)

第12図 第3発掘区AのPit

No.	径cm	深さcm	No.	径cm	深さcm
1	20	-23	10	16	-13
2	13	-19	11	9	-10
3	41	-22	12	10	-9
4	53	-8	13	12	-14
5	21	-12	14	14	-13
6	13	-9	15	9	-10
7	4	-10	16	10	-10
8	20	-16	17	9	-12
9	16	-12	18	10	-10



第28图 各发掘区平面图 上：第1·第2·第9 发掘区 下：第3发掘区

№	径cm	深さcm	№	径cm	深さcm
19	11	-9	30	12	-21
20	59×35	-11	31	10	-21
21	9	-8	32	19	-30
22	10	-17	33	13	-9
23	8	-26	34	12	-17
24	9	-10	35	14	-22
25	8	-14	36	18	-42
26	10	-10	37	11	-18
27	15	-11	38	30	-18
28	11	-11	39	40×28	-9
29	13	-19			

第13表 第3発掘区BのPit

№	径cm	深さcm	№	径cm	深さcm
1	31	-20	30	27	-13
2	27	-13	31	66×56	-24
3	12	-18	32	14	-15
4	10	-20	33	10	-9
5	12	-26	34	13	-16
6	15	-21	35	11	-11
7	19	-18	36	32	-10
8	12	-29	37	9	-13
9	13	-23	38	13	-13
10	42	-12	39	14	-12
11	9	-21	40	26×48	-12
12	11	-6	41	11	-17
13	9	-10	42	12	-9
14	19	-16	43	9	-13
15	10	-16	44	9	8
16	6	-9	45	16	-15
17	6	-7	46	56×18	-13
18	8	-7	47	17	-11
19	6	-8	48	13	-16
20	15	-24	49	9	-13
21	8	-13	50	7	-6
22	11	-23	51	26×39	-11
23	12	-24	52	8	-11
24	9	-23	53	8	-13
25	7	-7	54	12	-9
26	10	-8	55	23	-13
27	8×14	-16	56	35×24	-13
28	12	-9	57	20	-10
29	16	-23	58	10	-17

第3発掘区C 表面の観察により、第3発掘区B付近から東方へ傾斜する沢を利用した濠が認められた。幅およそ80cmで50cm程の深さをもつもので、その長さはほぼ15mにわたる。先端方向から6mの地点に断面観察のため1mの発掘区を設定した（第28図参照）。

層位：第1層は表土で20～35cm。濠の中央部は幾分削除され表土の一部を欠いている。表土中にレンズ状に黄褐色土が入る。第II層は白色火山灰で、これも一部にレンズ状に認められる。さらに下層には黒色土に白色火山灰を幾分含んだ層①がほぼ濠内外に堆積している。この層には、やはりややレンズ状に黒色土②あるいは黄褐色土③が含まれる。さらに下層には白色火山灰④が堆積し、濠の底面では黄褐色土に若干の黒色土⑤を含む。第III層の黒色土は濠の北西壁に認められるのみで12cm前後堆積している。第IV層は橙色火山灰層であり、濠はこの第IV層を掘り込んで作られている（第27図）。

遺構：完掘された後の濠は、第III層の旧表土面でおおよそ70cmの幅をもち、底面はやや緩やかに丸みを帯び30cmを計る。また溝の深さは40cmである。（松田 猛）

4）第4発掘区

8号住居址の、周囲の状態をさぐる目的で、8号住居址北東部に、5×3mの発掘区を設定した。

層位：発掘区南西壁面における層位は、第I層が表土6～12cm、第II層は白色火山灰層で、ほぼ全面に5～16cmの厚さで堆積している。第III層は暗褐色土で4～10cm、第III層上面では若干火山灰を粒状に含む。第IV層は橙色火山灰で、調査された住居址の第IV層がこれに相当する。やや軟質。南東側の第III層中に、24×7cmの橙色火山灰のレンズ状堆積が認められた。8号住居址の盛土の一部と思われる。全体として、南東の方向へなだらかに傾斜しており、各層ともその方向に厚さを増す傾向にある（第27図）。

遺構：発掘区中央から東北壁にかけて、第IV層上部には焼土が2ヶ所検出された。8号住居址よりのものは、直径44cm、厚さ8cmの不規則な円形をなし、他のものは、一部未発掘であるが、短径52cmの楕円形をなし、長径60cm、厚さ13cmである（第28図）。

遺物 表土より、直径5cmほどの自然礫が2個出土したのみで、遺物は検出されなかった。

（山本 文男）

5. 縄文早期の住居址概要

1) J-2号住居址

層位：東台地崖面に接して既に半壊状態となっており加えて地表面も極度の破壊をうけ、残りのプランを確認するに留まった。住居址東壁付近においてかすかに同遺構が掘り込まれた暗褐色土層が残されており、更に橙色火山灰、肌色火山灰層が確認された。西壁上面においては黄褐色の再堆積土が二層にわたって堆積しており、同質のやや薄い橙色火山灰が住居址内部に認められた。

遺構：住居址は、東西にやや長い楕円形を呈するが全貌を捉えることはできなかった。残存する東西軸は3 m 85cm。壁高は暗褐色土層から90cm。東壁付近では60cmを計る。柱穴と思われる **pit** は確認できなかった。

遺物：住居址床面から出土した。無文土器が2個体出土しており第30図1は深鉢形平底を呈する。胎土に多量の砂礫を含み、植物性繊維の混入もみられる。やや赤みをおびた黄褐色をなし、比較的脆い。口縁部断面はやや角形を呈するが、さほど顕著ではない。表面の調整痕は口縁下においては横走し、およそ1.5cmの幅をもつが、胴上半部から底部にかけては縦、斜走し一定ではない。第30図2も同様な胎土、色調を示すがやや内側に丸みをもつ口唇形態と縦走する幅広い調整工具に異なりがみられる。これらの土器群は、これまで釧路地方で出土している縄文早期の無文土器とは若干のちがいがあ。時間的には大槌毛式土器などの条痕文をとまなわないグループに接近した時期の所産と考えられる。

石器も同様に住居址床面から出土している。石鏃(第31図1・2)は比較的薄身に調整され小型であり特徴的な形態を備えている。搔器として一括されるグループ(第31図4～6・9・11～13)は、粗雑な第1次剥離が加えられた後に、部分的に各々の形に応じて刃部を作出している。比較的定形化された刃部(4・5)をもつ搔器を含めて、第2次剥離完了後においても粗雑な特徴をもっている。以上、黒耀石製。石錘が2個出土した(第33図1・2)。いずれも長軸形態を示し、それぞれの重量および石質は、120 g、火成岩の一種、35 g、安山岩。敲石(第33図13)は中央部および側面の周縁部に敲打痕が観察される。安山岩製。砂岩製の砥石(第33図16)は大形のそれから剥がれたと思われ斜行する浅い使用痕が認められる。また15も砂岩製の砥石破片で両面が使用されており、一面には溝状の使用痕も残っている。図示しなかったが黒耀石製の彫器が1例床面から出土した。左側縁

部上面から打撃が加えられたもので右側縁部にかけて幅広いグレイバー・ファシットをもつ。(西 幸隆)

2) J-3号住居址

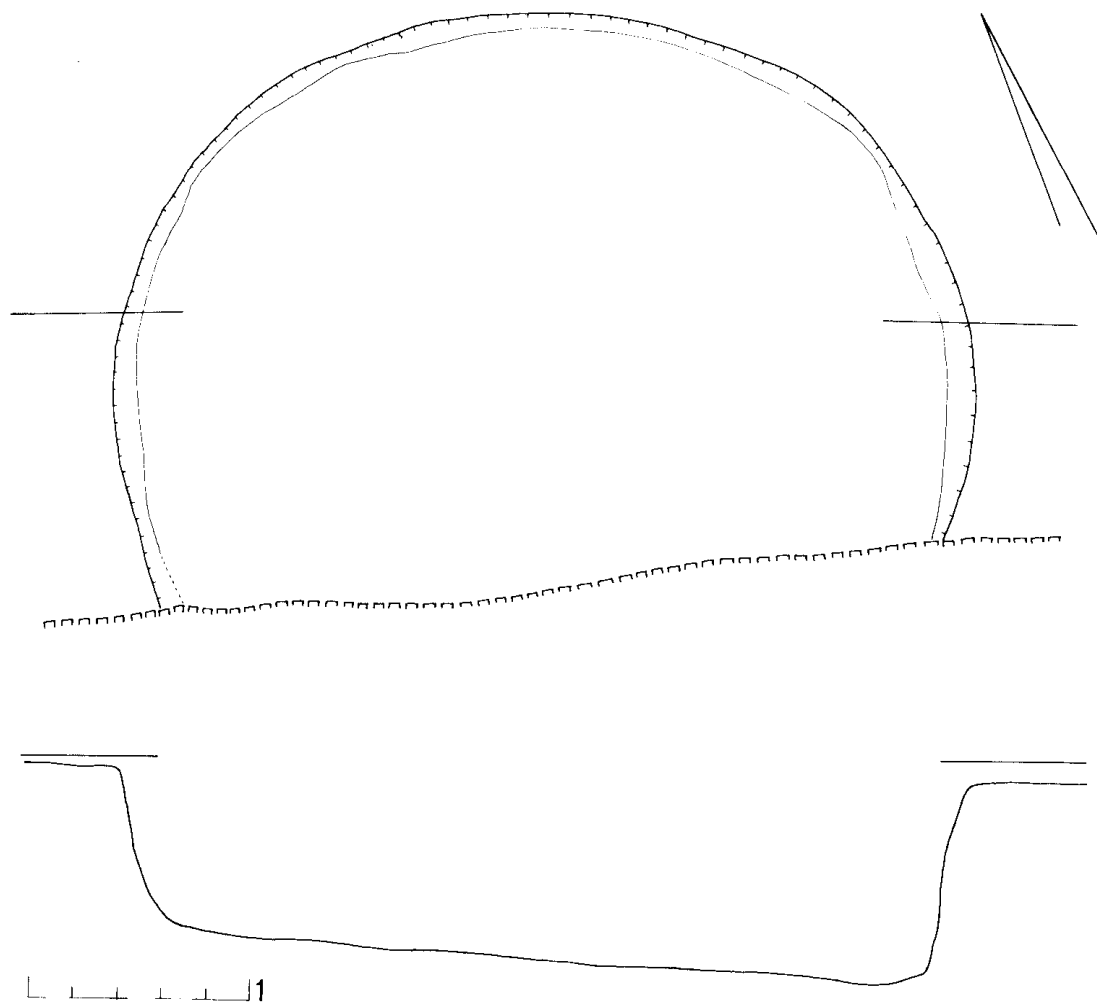
層位：3・4号住居址の中間に位置したためJ-2号住居址と同様にプランを確認するに留まった。住居址東、西壁上面において、暗褐色土層からの掘り込みが認められ、J-2号住居址と同時期か、あるいは接近した時期に構築されたものと考えられる。

遺構：住居址はやや円形に近い楕円形を呈する。南東壁は4号住居址により破壊をうけておりプランの一部は確認できない状態であった。残存する東西軸は5 m 65cm。壁高は西壁で75cm、東壁で66cmを計る。住居址内部において13個の **pit** を検出し得た。別表に示したとおりである。主・支柱穴としての要素を備えた **pit** は明確には捉えることはできない。むしろ、支柱穴として考えられるものが東壁付近に2個みとめられた程度である。

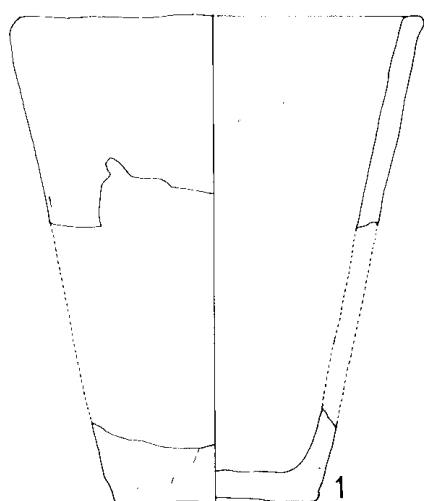
遺物：住居址床面から出土している。土器はみとめられず、第31図3・7・8・10、および第33図5・14、18がそれで覆土中からは第33図3・4・17・19の遺物が出土した。両端部を破損した石槍(第31図3)は、図において鮮明ではないが、両側縁に細かい剥離を施し両面加工。不定形な搔器としての機能をもつグループ(第31図7・8・10)はJ-2号住居址床面出土の石器もそうであるように、粗雑な剥離後の剥片を利用している。一方向にのみ刃部を作出する点でも共通する。こうした特徴は原材からの剥離過程で生じたとは考えられず、むしろ、機能的な作用によるものであろう。以上、黒耀石製。石錘は北壁床面付近(第32図参照)から出土したものと(第33図5)覆土中から2例出土している(第33図3・4)。前者は安山岩製で、後者の2例は砂岩製であり、重量はそれぞれ45 g、35 g、25 gである。砂岩製の砥石が住居址中央の床面から出土している(第33図14・18)。斜走する使用痕が観察される。同例が覆土中からも出土している(第33図17)。更に覆土中からは両刃形態の磨製石斧が1例出土した(第33図19)。輝緑凝灰岩製の他に、床面に黒耀石小剥片が狭い範囲に集中して検出された。(西幸隆)

第14表 J-3号住居址のPit

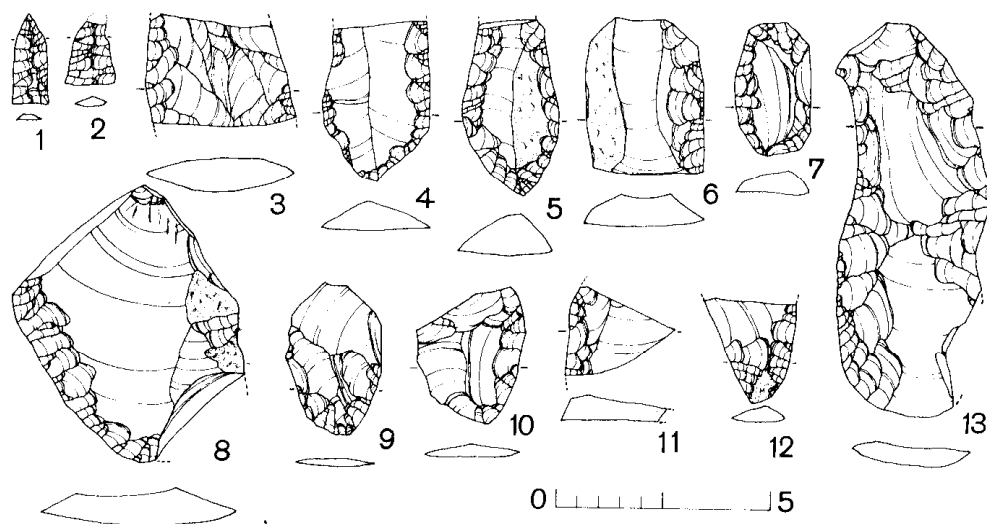
No.	径cm	深さcm	No.	径cm	深さcm
1	15	-59	8	8	-13
2	15	-43	9	10	-10
3	20	-18	10	10	-7
4	25	-55	11	9	-21
5	14	-44	12	14	-19
6	10	-20	13	14	-42
7	12	-19			



第29图 J - 2 号住居址平面图



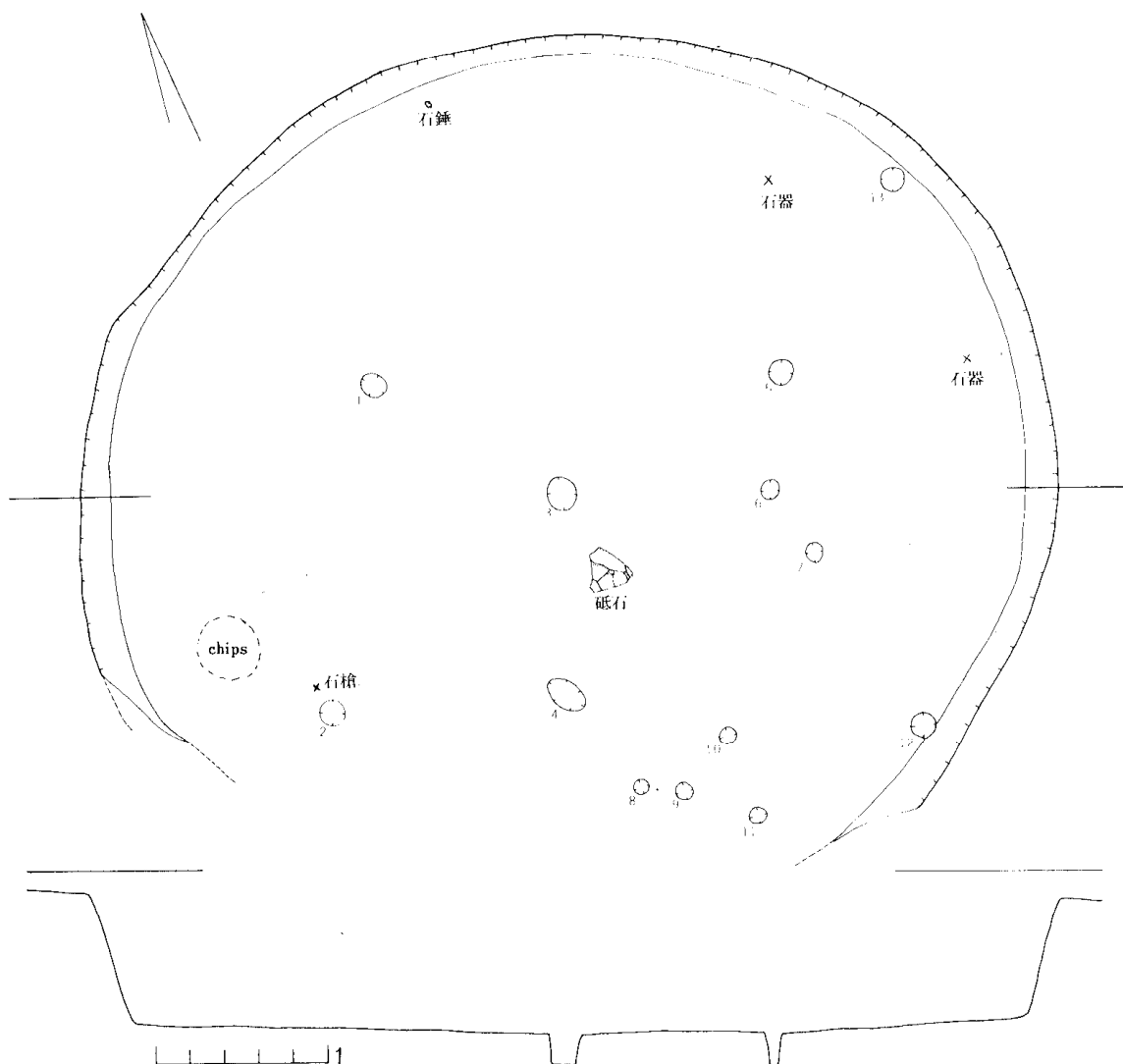
第30图 出土遺物 6



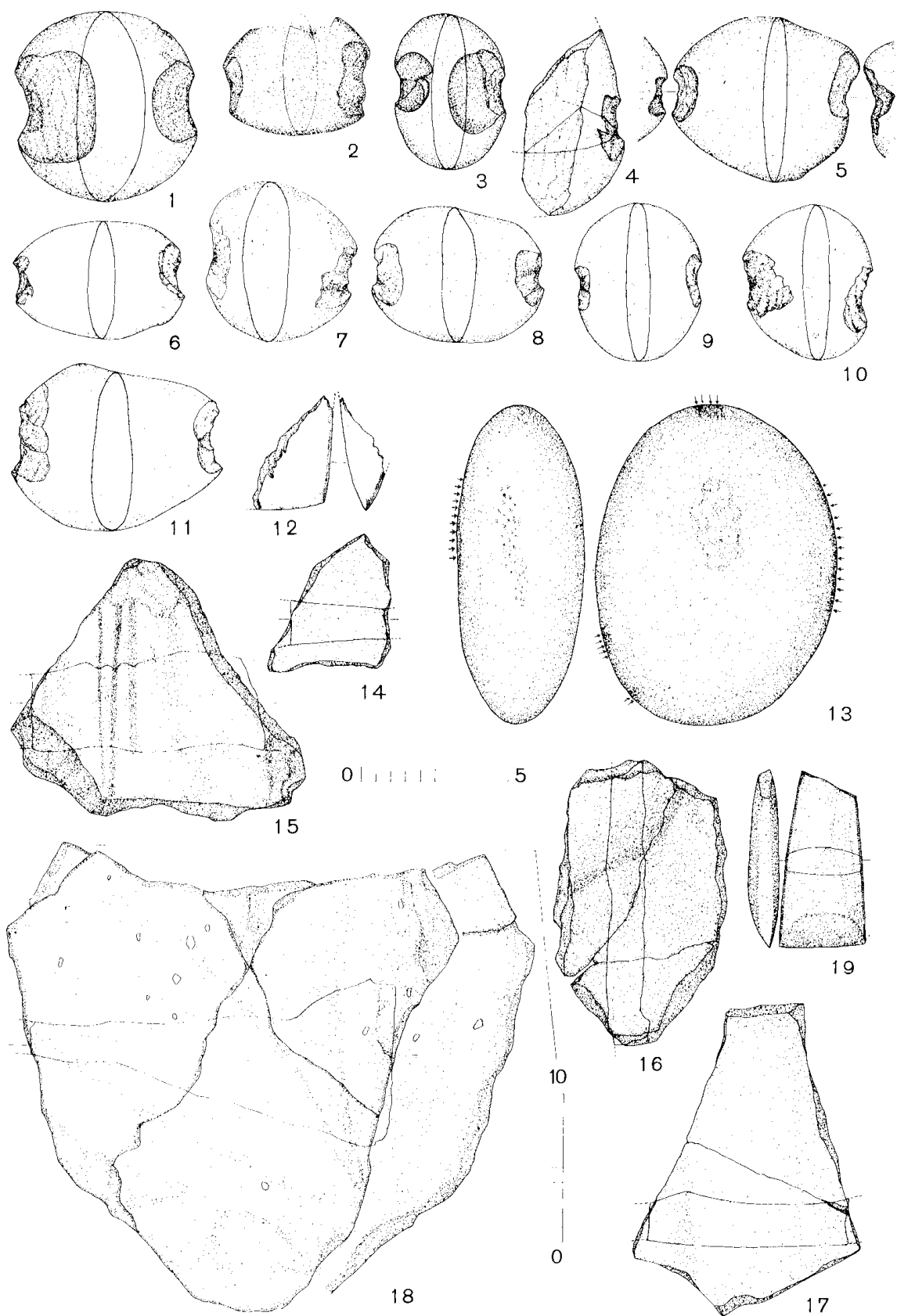
第31图 出土遺物 7

1、2、4~6、9、11~13、J-2号址

3、7、8、10、J-3号址



第32图 J-3号住居址平面图



第33图 出土遺物 8

1、2、13、15、16、J-2号址

3~5、14、17~19、J-3号址 6、4号址

7、9、11、3号址·8、12、5号址·10、1号址

6. 結 語

S T V遺跡の過去2回に亘る発掘調査のあらましは前述した通りである。ここではこれらの結果を要約し、気付いた二・三の点について述べ結語としたい。

第一次調査では西台地の擦文文化期の竪穴住居址とその周りの人間活動に必要な平坦面を可能な限り発掘し、住居址とのかかわり合いの追求に主眼をおいた。また同様なねらいのもとに東台地の擦文文化期の竪穴住居址6個の内2個を発掘し、ここではそれぞれの住居址間の距離が接近していたことなどから盛土の重なり具合に注目しそれらの相対的な時間差を追求した。第二次調査では、東台地の残り4個の住居址と、その周りの発掘を第一次調査の目的に沿っておこない、3号住居址ではそれにとりまなう屋根に盛った土の重量などを測定する材料を得た。また調査の過程で、擦文文化期以前の遺構と思われるものが4箇所存在することが認められ、これらの内2箇所を発掘し、縄文文化早期の住居址であることを確認した(J 2・3号址)。また、残り2例もこの時期の住居址ではないかという予測をもったが既に大半が、擦文文化期の住居址構築時に破壊されているため調査を断念した。

発掘した10例の住居址及び各発掘区にみられた遺構は層位の記載でもふれたように、第II層とした厚さ5~10cmの白色火山灰の台地及び低地に普通にみられるもので雌阿寒火山灰(Me-a)に対比される。その実年代は約500年前といわれている。

各遺構の年代は、層位、出土遺物、構造などから大きく縄文文化早期と擦文文化期の末期に分けられた。擦文文化期の遺構及び遺物は西及び東の台地にまたがるが、縄文文化早期のそれは、東台地に集中し、西台地にはみられなかった。その分布範囲は、1号住居址から6号住居址までの間約500mに限られそうである。調査では1・2号間、2・3号間、3・4号間に各1個の3個、6号に重複して1個の住居址が予測できたが、6号の重複例は黒耀石の破片が出土しているだけで、他に明確な所属時期を示す遺物がないので、不確かであり、実際にはもっとせまい面積になる可能性もある。J 2、J 3とした2つの住居址は極めて僅差の年代を有するもので、釧路地方の縄文早期の平底の鉢形土器群の中では、テンネル式かそれよりも少し古い時期の所産とみて大過なからう。図示されていないが、J 2の住居址でグレーバーが1本出土していることは注目してよい。また全体に出土遺物が乏しく、特にJ 3の住居址は、土器をまったく出土し

ていないということからもそう長い年代のものではなく短期の住居に使用されたものであったのでなからうかという想定も可能ではあるまいか。

本調査の主目的であった擦文文化期の竪穴住居址は前述したように8個を完掘した。西台地の7号、8号の住居址はほぼ同時に存在したかとも考えられるが住居構築時の相対的な新旧関係は不明である。これらの屋外遺構として、両住居址南側に柱穴様の配置がみられ、何らかの遺構が付属して存在したことは疑う余地がない。

発掘区では、8号の西側斜面寄りに一人一人が入れる程度の大形 pit が発見され、これには柱穴12ヶを有し、中央に焼土がみられた。貯蔵穴とみることもできるが今後の課題である。類似の pit は平地住居を想定させる柱穴の配列をみる第3発掘区においても、その西側にみられる。ここではこの他に焼けた自然礫をフラットに敷いたような状態の浅い落ちこみをもつ特殊な遺構も検出されており、同様な例は1号住居址西側3mの地点にもあって問題をなげかけている。更に第3発掘区では、北側斜面にかかって南向きに湧水のみられた地点に向って斜行する幅70cmほどの溝が発見されていて注意をひく。やや湾曲する東台地の中軸線に沿って配列された1号から6号までの住居址は、それぞれの住居址にとりまなう盛土の重なり合いから、舌状の台地先端に位置する1号が最も早く次いで2・3・4・5・6の順で構築されていた。この事実は今後こうした小さな台地に近世アイヌの1コタンに近い数の住居が営まれて行く過程を知るための一つの例証となろう。

アイヌには病人ができたり死人があった場合、家を焼いて他へ移るといふ風習があった。本遺跡では、1・2・7・8号住居址は、火災に遭い廃棄されたものである。果してそうした後世のアイヌの風習と結びつくかどうかは詳かでないが、擦文文化期の竪穴住居址一般に火災によるものが多いことから推して、考慮する必要がある。これらの焼けた住居址では、床面に接して、柱、屋根材の丸太、羽目板と考えられる板材、ヨシ類の炭化物が重なり、焼土に覆われるといった傾向が窺えた。特にこの焼土は、壁際に厚く、中心部に向って薄くなっている。これらのことから、本遺跡における、擦文文化期の竪穴はアイヌのいうトイチセに近いものであったと考えられる。

擦文文化期の住居址には往々にして、四柱穴の存在がはっきりしないものが多いようである。本遺跡もその例にもれないものであった。ほとんどの住居址は、漸くそれと思われる個所に浅い落ちこみがみられる程度で、他の時期の遺構に重複した場合には、まったくその痕跡すらないという有様である。それに較べ壁沿いに走る柱穴

は安定した深さをもって発見されている。また壁の高さが、これよりも古い時期の竪穴住居址に比して、高いといった特性をもっている。これらのことから、主柱を中心に壁沿いに至る支柱によって支えられるといった上屋構造を考えることができる。住居構築の過程は、竪穴を掘るという作業を除けば、近世アイヌのそれに近いものではあるまいかと思う。

カマドは2・4・7・8号住居址の東側にみられた。1号にもあったと思われるが、その位置が崖崩れで消滅しているため確認できなかった。その位置するところは、住居址の大きさ、長軸の方位にかかわらず、ほとんどが同じ位置に設けられ、極端に偏在するものではない。5号・6号についても鋭意その有無について追求したが、ついぞその所在をつきとめることはできなかった。おそらくはじめからなかったものと判断せざるを得なかった。特記すべきことは、3号住居址においてカマド址の右側に入口と考えられる舌状の落ちこみがあったことである。しかもそれには、落ちこみに付随するとみられる小 pit をともなっており前小屋の存在を想起させるものである。同じような落ちこみは5号にも存在したが、これは少し離れたところに浅い径の大 pit が検出されただけで、小 pit の存在はない。これらの二つの竪穴にみられた遺構は、田表土の上に堆積した盛土を剥いだ際、壁面にも認められた落ちこみが、平面図にみられるような輪郭をもって、明らかに住居址にともなう遺構として現われたものである。5号住居址は前述したように、その構築年代は3号住居址よりも遅く、勿論カマドをもっていない。にもかかわらず、同じような位置に、同様の施設をもつということは、早い時期の伝統を継承したものとみななければならないであろう。とすればこの時期にかなり普遍的に存在したものとみななければならないが、本遺跡において発掘された他の住居址には認めることができなかった。これは、この落ちこみが、田表土である黒土層に掘りこまれている場合、この層が極端な表現をすれば、粉末状に近い軟かさをもっているため、なかなか発見が困難であるということに起因するものであったかも知れない。ということは、他の住居址にあっては、丁度この落ちこみの線が、同じようなカーブを描いているからである。この一ことだけで俄かに断定するわけには行かないが、今後、擦文文化の竪穴の発掘にあたっては、この位置における同様の遺構の有無について吟味しなければなるまいと思う。

西台地では屋外における貯蔵穴様の大形 pit 2例が発見されたが、東台地では4号・6号の両住居址内にそれとみられる隅丸長方形の遺構が検出された。くり返し述

べるが、6号は4号よりも新しく、本遺跡において最も遅く構築された住居址である。6号ではこれが東壁の両隅にそれぞれ対をなして発見されたものである。その内の北東隅に設けられた pit は、位置といい、形状といい4号のそれとはほぼ同じといっても差支えない。これなども、先の3号、5号住居址の落ちこみの問題と同様のことがいえる。それぞれ、その中から道具類、食料にあてたと考えられる遺物の出土をみているので、貯蔵穴、或いは物置き的な遺構とみなせる。

土器の出土量は各住居址とも非常に少ない。使用期間廃棄時における状況等によって一概にいえないが、このような姿は何も本遺跡の竪穴住居址に限るものではなく釧路地方を含め道東全般に共通した擦文文化期におけるこの土器の時期に共通してみられる現象であるこれにはもっと別な要因が働いていたとみななければならない。

近代までアイヌによって使用されていた蓆編み用の石錘りは道内の博物館にも保管展示されている。それに類似した細長い自然石が、1個所にかたまって1号住居址から40個余りが出土している。住居址内での位置は北隅に近い。大きさは長さ6cm前後、幅が4cm、厚2cm、重さ7・80g前後の数値を示す砂岩、安山岩などからなる自然石で、糸をかけ易い形状を示しているのがほとんどである。だが他の住居址からは出土していない。屋外の平坦地にもみられなかった。もしこれが蓆編みの錘とすれば、当然、蓆編み器の存在が考えられる。それが一つの聚落の中で、各戸に備えられたものなのか、それとも共有物件として存在したものなのか、必要に応じて製作され使用されるものであるだけに、興味をひかれるところである。

金属器としては刀の鞘の鍍金具が2例(1・8号)、マキリらしいもの2例(1・4号)、タシロ3例(3・8号)、その他中空になった鉄製品2例(4号)がある。この中でも出土点数が最も多かったのは8号で、この他に、不明の鉄片1例が加わり、4点出土している。

注目すべき遺物としては、円筒状の粘土塊、漆器片、イネ科の植物の実がある。円筒状の粘土塊は3号住居址の壁際の pit から2本並んで出土したもので、色調はこの台地の下に露出する粘土に類似した白色を呈するがその形態及び大きさはアイヌの運搬具の一つである背負袋・ケトシに入れて運べる量である。今回の調査では、普通一般にみられる粘土塊は、2・4・8号にもみられた。この内4号の例は隣りの3号と同じく浅い pit の中から出土し、そのすぐそばにもう一つみられた。しかもその住居址内における pit の位置もほぼ相似た場所であったのが注目された。2号、8号の粘土も pit にこそ入っていなかったが、その置かれた位置は、3号、4号と同じ

位置である。漆器片は8号で出土した。粘土塊のあった地点とカマドの近くから出土している。ほんの破片であるが形状から察するに椀・イタンキの類である。ここからは土器も出土している。イネ科の植物の実、1号と第3発掘区からどちらも柱穴状の pit の中から出土した。炭化していず、擦文文化期の遺物としては疑念がもたれるが、出土状態はまったくそれぞれの遺構にともなうものとみて差支えなかった。この正確な種名については近日中にも専門家の同定を得た上で報告したい。

植物性の遺物としては、前述のイネ科の実以外に、クルミ様の炭化物が、6号住居址の南隅の大形 pit から出土しているだけである。

全体に出土量の少ない自然遺物の中で、種類の多かったのは、動物遺骸である。獣類、魚類、貝類がある。魚類は微量で同定は不可能に近い。獣類で目立ったのはエゾシカの遺骸である。他の獣類も8号で微細な破片があったが詳らかでない。エゾシカは角(2・4号)、四肢骨片(1・2・7・8号)、下顎骨(8号)があった。2号からは金属器による加工痕のあるものが出土している。これらの骨は総量で鹿一頭体に満たない量であるが、同一個体かどうかは明らかでない。角の状態からすれば冬から春にかけてということになる。ともあれ、ここにみられるエゾシカは、明治以前には北海道に多産し、サケ・マスとともに、アイヌの重要な食料源であった動物である。かつては陸産の動物としては最も多く採捕された、獣類であったろう。そのため道内にアイヌ語で鹿に因んだ地名がいたるところに残されている。夏の間は全道に分布し、その行動は広範囲に亘るが秋になると群れをなして積雪の少ない道東、道南地方に移動し、越冬するといった習性にあった。したがって越冬地は周年エゾシカの採捕可能地域である。当然釧路地方もその地域内にある。断片的な出土量であるとはいえ、エゾシカの遺骸の出土は、そこに居を定めた人々が、このエゾシカとかなり緊密な関係にあったことを物語っている。北海道の先史文化の研究はかつて多産したこのエゾシカとの関係において見直す必要があるように思えてならない。ウバガイはエゾシカに次いで多い数を記録した。3・4・6号住居址から出土している。この貝も釧路地方では多産した種で海産の貝類である。その他の海産の貝類としては、アサリ、エゾタマキビ、オオノガイが極く少量8号から出土している。オオノガイは、1号でもみられた。これらの貝類の生息地帯は現海岸線に近い位置であったろう。とすれば、本遺跡から最も近い位置でも、直線にして2kmの距離があるが、当時としては半日もかからない至近距離とすることができよう。ウバガイに次いで多かったのは淡

水産のカワシシガイ科の1種である。3・6・8号で検出されている。この仲間は、釧路地方では現生種で数種を数えるが、数十年前までは、市内の沼沢地に普通にみられた。本遺跡付近もかつてはサルシナイと呼ばれ、沼沢地になっていたところであり、これらの貝の生息は充分考えられる。現在でも生息している春採湖、別保太、釧路川を考慮しても、すべて2km以内にある。

最後に同時期における聚落構成についてであるが、これについては、カマドをもつものともたないものの二つにグルーピングされることを指摘し、詳細については本調査において終始この問題にとりくんできた本書に発表されている宇田川洋氏の論文を参照されたい。

(沢 四郎)

参考文献

- 大飼哲夫(1952)北海道の鹿とその興亡、北方文化研究報告、pp. 4~45
宇田川洋・沢 四郎(1969)北海道東釧路遺跡の竪穴発掘報告、考古学雑誌、第55巻1号 pp. 41~51

謝辞

本遺跡の第一次・第二次と2ヶ年に亘る調査では多くの方々にお世話になった。特に、遺物整理に当って、金子浩昌氏、鈴木順雄氏、岡崎由夫氏に御指導、御助言を賜った。地形測量では佐藤信雄氏の協力を得た。発掘調査の進行に当っては、釧路女子短大小甲幸一氏、山元一雄氏、佐々木源範氏、郷社正雄氏、釧路北陽高校戸田光明氏、葵建設株式会社、コオウン地所株式会社、S T V 釧路送信所、釧路市教委古谷達也氏、橋爪義憲氏、橋井利男氏、森田春夫氏の協力があつた。以上銘記して厚く御礼申し上げたい。



図版 1 遺跡全景 1 (左：1～6号址・右：7・8号址)



図版 2 遺跡全景 2 (左：7・8号址・右：第3発掘区A・B)



図版3 遺跡全景3 (3~6号)



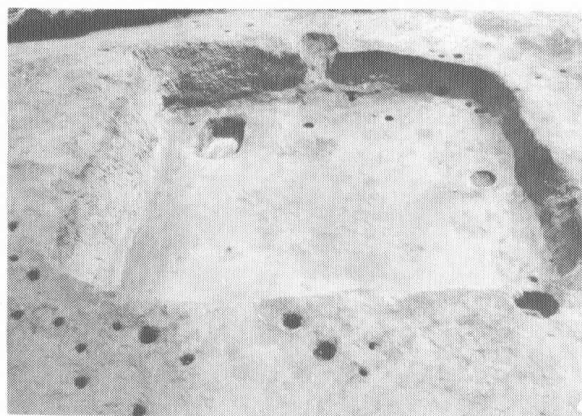
図版4 1号住居址



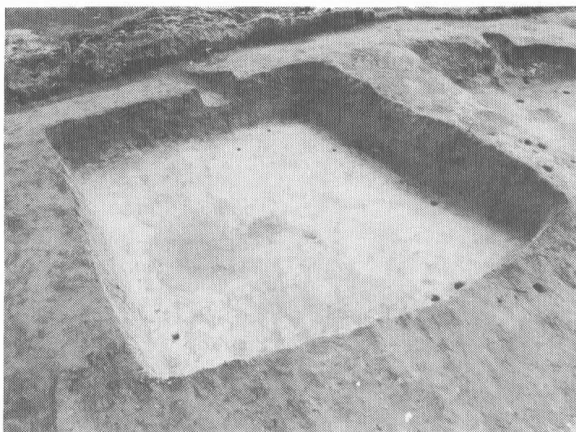
図版5 2号住居址



図版 6 3 号 住 居 址



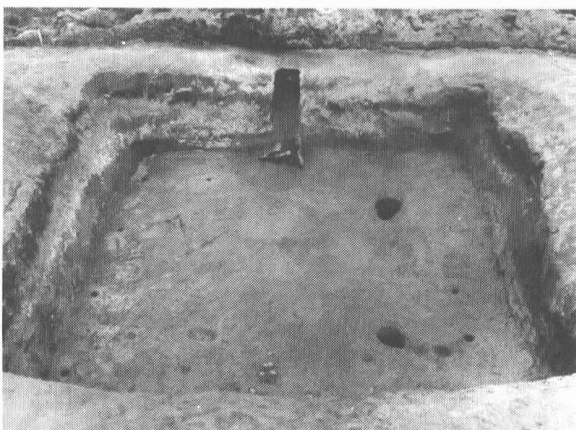
図版 7 4 号 住 居 址



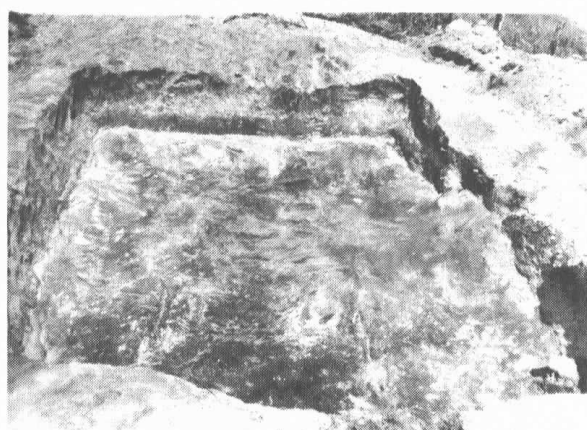
図版 8 5 号 住 居 址



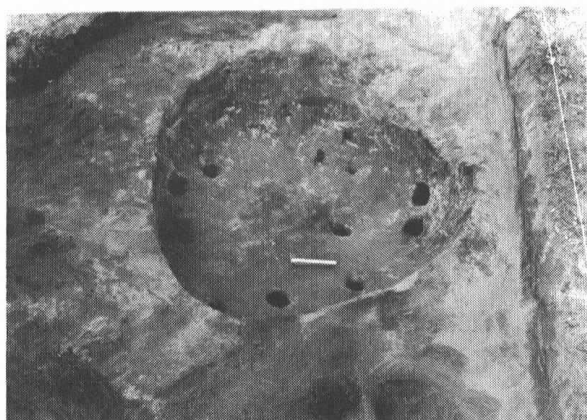
図版 9 6 号 住 居 址



図版10 7 号 住 居 址



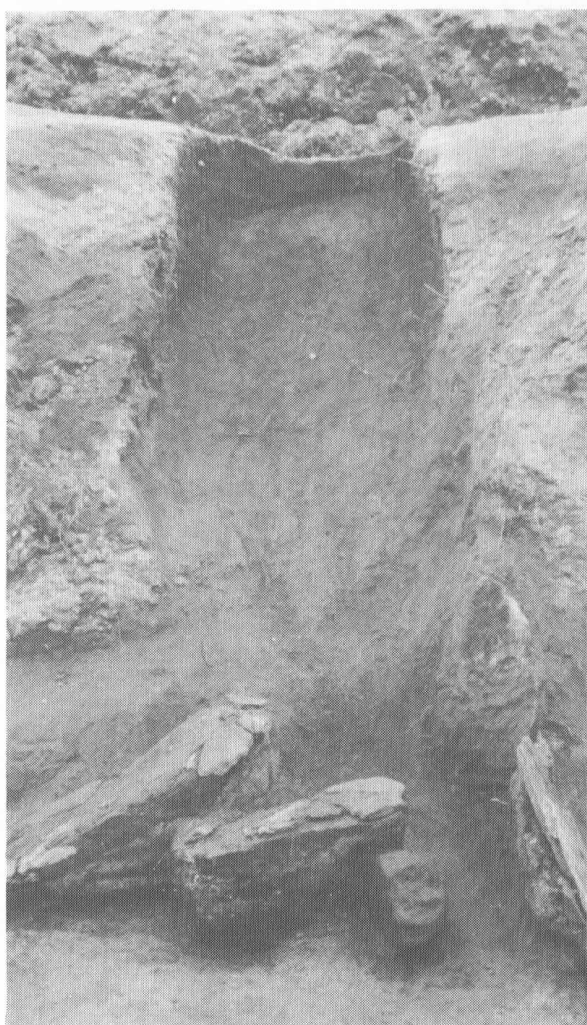
図版11 8 号 住 居 址 及 び
覆 土 中 の 炭 化 物



図版12 第1発掘区の大形Pit



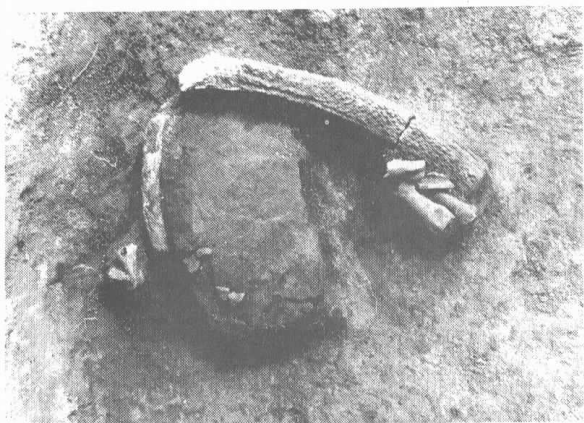
図版13 J-3号住居址



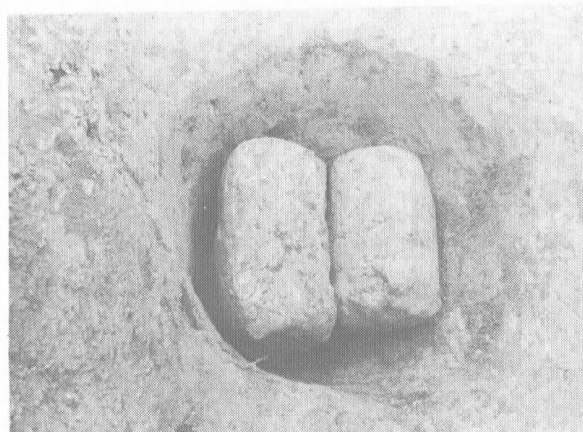
図版14 7号住居址のカマド址



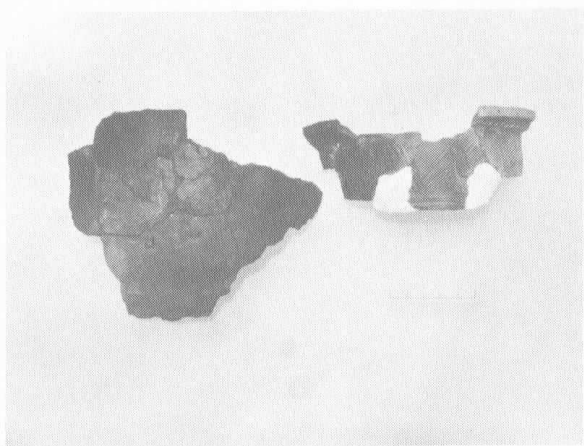
図版15 8号住居址のカマド址



図版16 2号住居址の鹿角・鹿骨出土状態



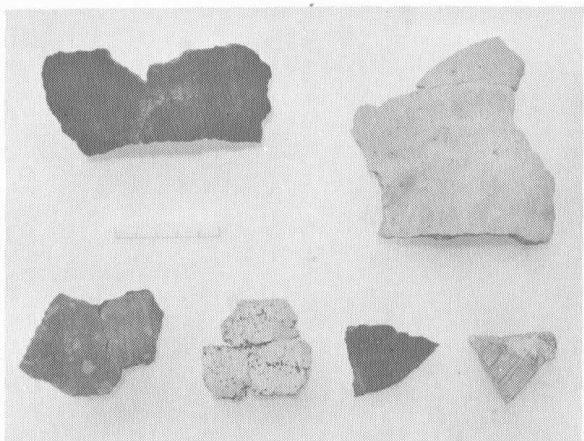
図版17 3号住居址粘土塊出土状態



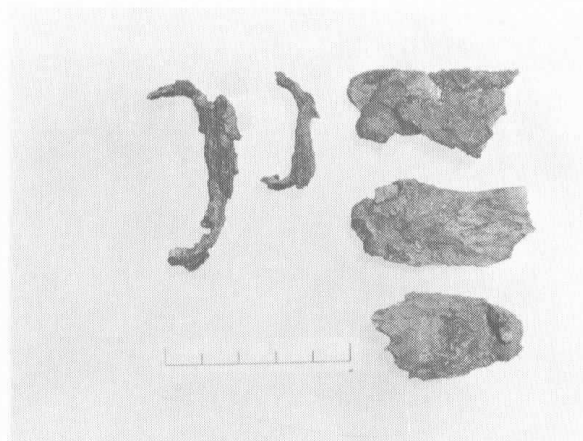
図版18 8号住居址出土遺物1



図版19 8号住居址出土遺物2



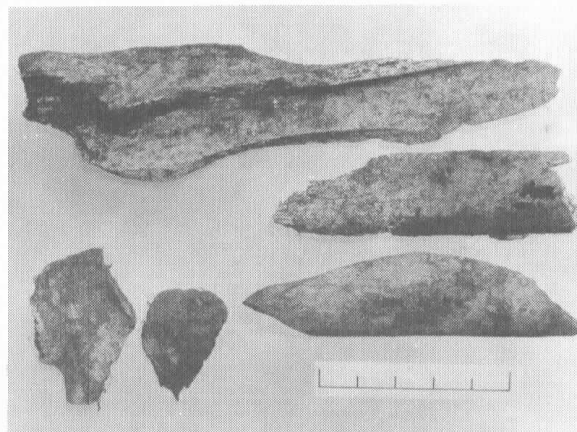
図版20 2号及び8号住居址出土遺物3



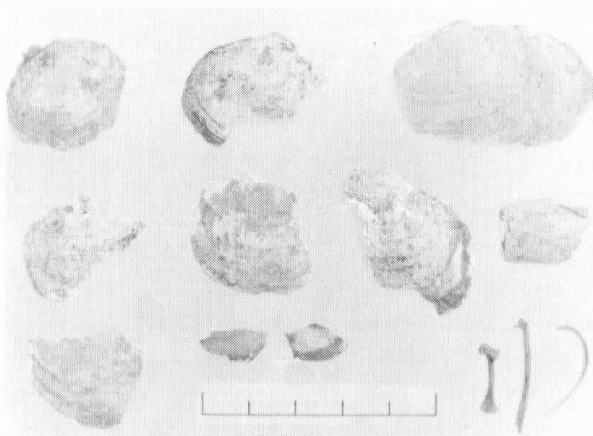
図版21 1号及び8号住居址出土遺物4



図版22 8号住居址出土遺物5（木製品）



図版23 8号住居址出土の自然遺物1



図版24 8号住居址出土の自然遺物2



図版25 8号住居址出土の自然遺物3



図版26 J-3号住居址床面の砥石